

367
720



1

0050307-000

特209-907

文法に立脚せる復文漢作文の演習

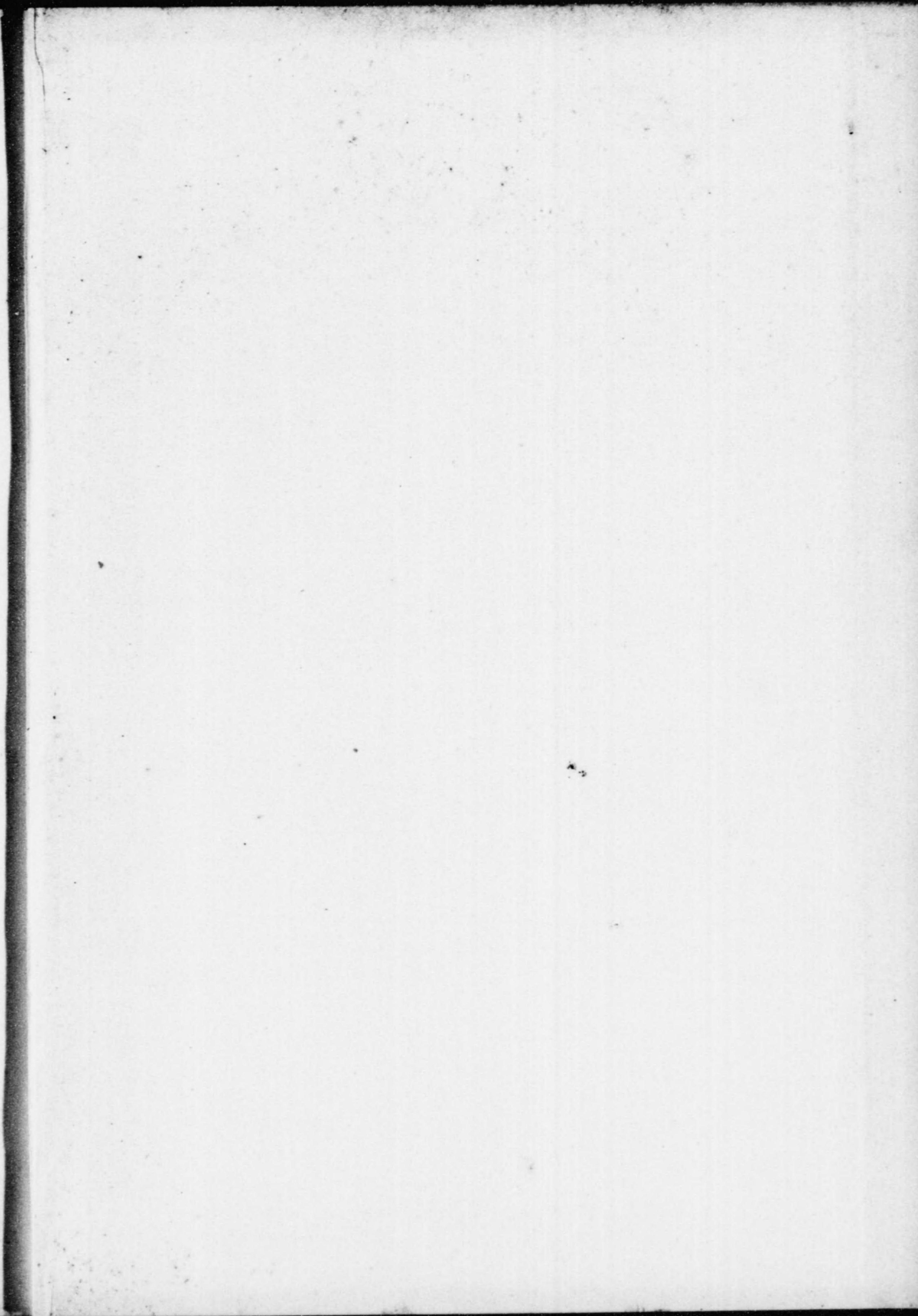
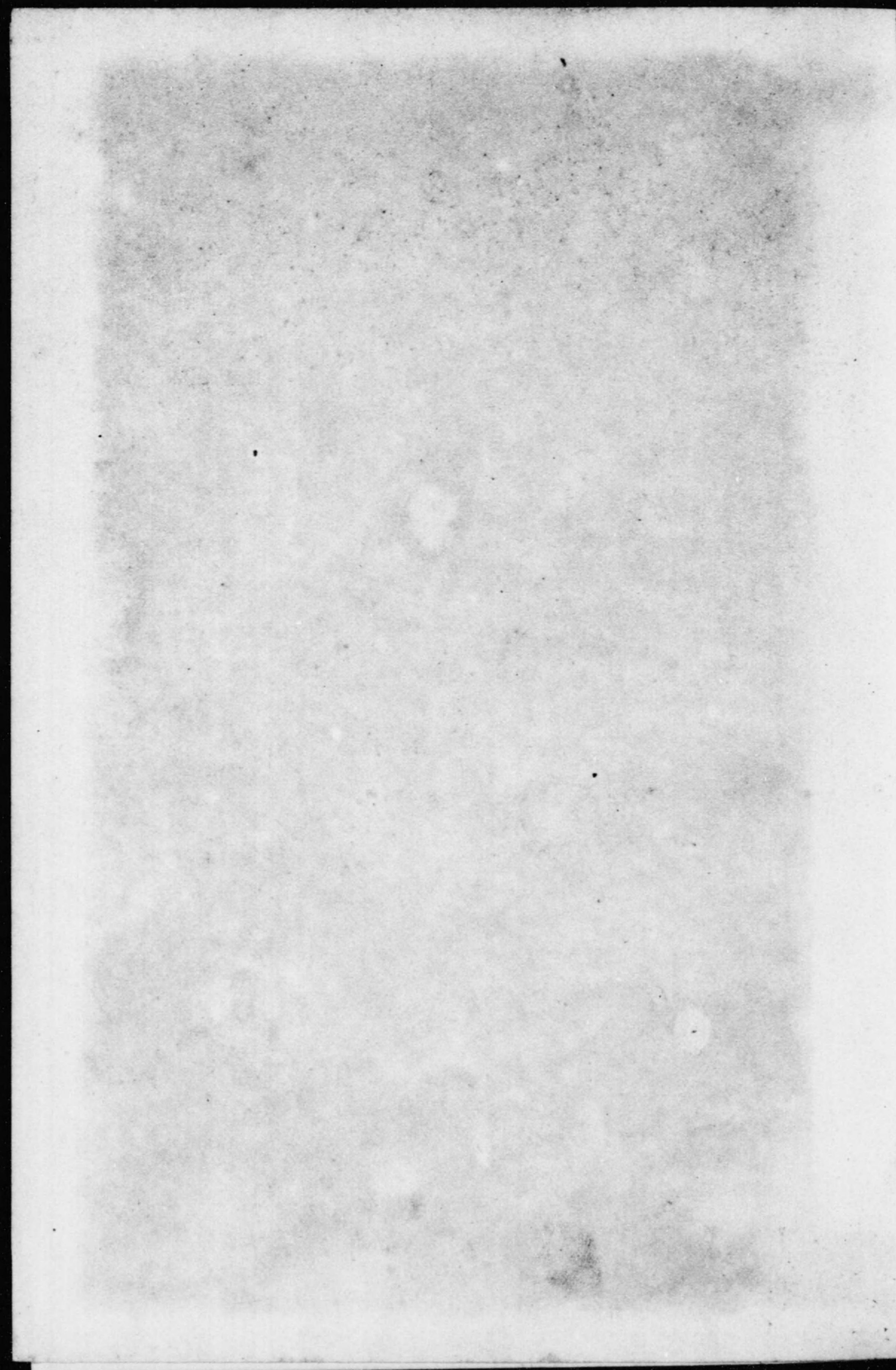
内田勇・著

大同館書店

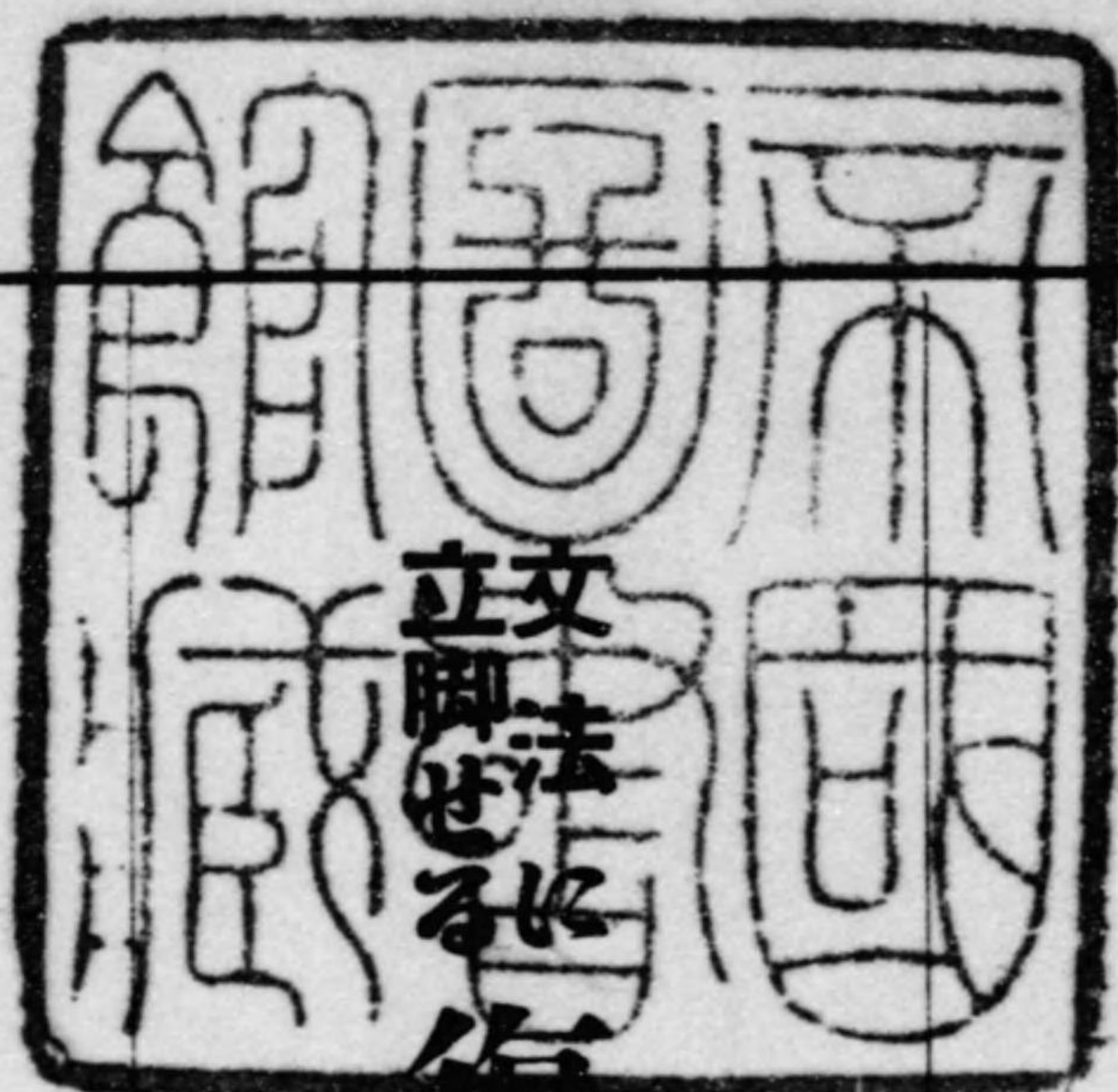
昭和10

AHJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです



特209
907



内田 勇 著

立文法に
復文漢作文の演習

東京・神田 大同館藏版



序言

文檢國漢科を受験する者が一番困ることは、漢文の復作文の参考書が乏しいことであらう。復文の方はそれでも近時、一二種店頭に見かける様であるが、漢作文演習専攻の書籍は未だ一種も見かけぬやうである。古くは、皆川淇園の習文録があるが、入手が困難であるため、一般に知られてゐないし、又用ゐられてもいないやうである。従つて漢作文の演習には誰しも悩まされてゐるのは事實であり、漢作文力の薄弱なことも亦事實である。次に言ふことは、第一章に詳述して置いたが、簡単に言へば、文檢漢文科の決勝を左右するものは、この漢作文の出来不出来である。合格水準の上下にある數名乃至十數名の者の讀解方面の點數はほゞ同じである。この數名の者の運命を左右するものが

漢作文なのである。讀解方面に於ては、得點數の差異は餘り大きくはないが、漢作文の得點となるとその開きは實に大きい、故に合格を決定するは、漢作文である」と。

私は右の様に考へて、漢作文の演習には相等の努力を拂つた。國漢科の豫試に於ける復文、漢文科本試に於ける漢作文は輕視することの出来ぬものである。又、一度合格の榮を負うて中學校に職を奉じた場合、漢作文一つ、漢詩一つも出来ぬやうでは何としよう。生徒の前に堂々と立てる教師であらうか。讀解中に取扱ふべき語法の説明が立派に出来るであらうか。語法の會得、漢文の構造を理解する上から云つても、復作文の研究が最もよいのである。

私は淺學をも顧みず、此にこの一書をもしたのは、右の理由によるのである。師に教へられたまゝを書き綴つたものではない。苦しん

で此の道を進みつゞけて來た者の、體驗と實際から生れた書である。同じ道を行く者にとつて、これこそ眞の好同伴と、ひそかに思ふ次第である。なほ誤りもあること、思ふ、幸ひに御批正あらんことを。

昭和十年四月二十三日

碧雲湖畔十步堂にて

著者 識

△本書の特色

1. 本書の目的は名文家の養成ではない。文検合格圏内に確實に入するに足る實力養成にある。
2. 復文問題は四書より、特に論語より主として撰出したこと。
3. 作文演習問題は、古人の學習の跡を尋ねて淇園の習文録より、又演習に適當と思はれる近代作家、支那作家の作より蒐集せること。
4. 本書一部の學習により復作文は元より、漢文法の大要を會得し得るやう編纂せること。
5. 「言、云、曰、道、是、此、之」、「自、由、從」等復作文に始終現はれて來る主要文字の異同解説を實際の解説に當つて辨じたること。
6. 最も重要なる助動詞、前置詞、助辭の用法を實例を擧げて解説した

ること。

7. 解答の部には復作文上主要なる文法的説明を加へたること。即ち無味な文法を實練習に當つて適切に解説せること。
8. 主として文檢合格を目標として編述してあるが、又一般學生諸君の好參考となるべく用意せること。

△注意事項

1. 第一章の論旨を十分會得すること。
2. 平生本書を手にし、讀解と並行して文法的基礎を養ふこと。
3. 復作文だけの練習でよい人は、試験前三十日位、朝夕數題づつ演習して行くこと。
4. 短日時に問題を多く演習したとて實力は付かぬ。細く長く続け

なければ駄目だ。

5. 解答を見ることを急いだら、苦痛は少ないが實力は付かぬから、十分推敲してから解答を見ること。
6. 復作文、殊に漢作文演習に當つては、先づ全文を讀んでから射復にかゝること。
7. 作文問題は、原稿用紙にてなすこと。試験の實際も亦原稿用紙であるし、射復後の數字點檢に最も都合よし。

文法に
立脚せる
復文・漢作文の演習

目次

第一章 序説……………	(一)
(1) 輕視出來ぬ復文と漢作文……………	(一)
(2) 復文の實力を養成するには……………	(五)
(3) 漢作文の實力を養成するには……………	(一〇)
(4) 受験場に於ける漢作文の實際と その心得……………	(一五)
第二章 漢文の構造……………	(三)
(1) 文構成の基礎……………	(三)
(2) 單文・複文・重文……………	(六)
(3) 主語・述語より成る文と其の語順……………	(三)
(4) 主語・述語・客語より成る文と其 の語順……………	(三)
(5) 主語・述語・補語より成る文と其 の語順……………	(三)
(6) 主語・述語・客語・補語より成る 文と其の語順……………	(三)
(7) 語順の轉換せる文……………	(三)
(a) 有無が述語となる場合……………	(三)
(b) 疑問文の場合……………	(三)
(c) 咏嘆文の場合……………	(三)
(d) 韻文の場合……………	(三)
(e) 述語と客語の轉換せる場合……………	(三)
(イ) 之字を客語の下に加へるもの……………	(三)

- (ロ) 是字を客語の下に加へるもの……(一九)
- (ハ) 於字を用いたもの……(一九)
- (ニ) 之、是、於字等を用いたもの……(四〇)
- (ホ) 客語が代名詞で打消助動詞の下に来るもの……(四〇)
- (ヘ) 疑問代名詞が客語、補語となれるもの……(四一)
- (ト) 補語、副修語と述語との語順轉換せるもの……(四三)
- (チ) 以字による語順轉換……(四三)

第三章 助詞(助辭)の性質

と其の用法

- 也の性質と其の用法……(四三)
- 矣の性質と其の用法……(四八)
- 焉の性質と其の用法及び、也矣と

第四章 表格語法

- の異同……(五一)
 - 乎の性質と其の用法……(五四)
 - 哉の性質と其の用法……(五七)
 - 與(歟)の性質と其の用法……(五九)
 - 邪(耶)の性質と其の用法……(六一)
 - 夫の性質と其の用法……(六三)
 - 耳、爾、已の性質と其の用法……(六五)
- (a) 受身格語法……(六七)
- (b) 使役格語法……(七三)
- (c) 表時格語法……(七六)
- (d) 當然・義務・豫定格語法……(八四)
- (e) 比較格語法……(八七)
- (f) 選擇格語法……(八九)

文及び解説……(一五四)

第七章 文檢國・漢科豫備試

驗復文問題集……(一九)

第八章 試験問題復文解説……(三〇)

第九章 漢作文演習問題集……(三四)

- (1) 習文録射復文問題拔萃……(三四)
- 宮甲……(三八)
- 商甲……(三九)
- 角甲……(三九)
- 徵甲……(三〇)
- 羽甲……(三一)
- 商乙……(三一)
- 宮丙……(三一)
- 徵丙……(三三)

- (g) 反語格語法……(九二)
- (h) 可能格語法……(一〇一)
- (i) 比喻格語法……(一〇四)
- (j) 假定格語法……(一〇九)
- (k) 打消格語法……(一一)
- (l) 禁止格語法……(二七)
- (m) 二重打消格語法……(三〇)
- (n) 疑問格語法……(三五)

第五章 復文演習問題集……(二六)

- 論語(七十四題)……(二六)
- 大學(十題)……(三四)
- 中庸(十一題)……(四六)
- 孟子(二十八題)……(四八)

第六章 復文演習問題の原

宮丁	……………	(三三)	第十章 漢作文演習問題の原文及び解説	……………	(三九三)
羽丁	……………	(三四)	(1) 習文録射復文問題の原文及び解説	……………	(三九三)
羽戊	……………	(三五)	(2) 漢作文演習問題の原文及び解説	……………	(三九六)
宮巳	……………	(三五)	第十一章 文檢漢文科作文問題集	……………	(三九六)
徵巳	……………	(三六)	第十二章 第六拾九回漢文科應試實際作文と東京帝大谷口先生の御批評	……………	(三七)
宮壬	……………	(三六)			
角壬	……………	(三七)			
商癸	……………	(三八)			
(2) 漢作文の演習問題	……………	(三八)			
〔百字未満〕(十二問)	……………	(三九)			
百字以上二百字未満(三十七問)	……………	(三九)			
二百字以上三百字未満(十四問)	……………	(三九)			
三百字以上のもの(五問)	……………	(三九)			

目次終

文法に立脚せる 復文・漢作文の演習

内田 勇 著

第一章 序 説

1 輕視出來ぬ復文と漢作文

文檢の國・漢科に於てはその豫備試験に於て、又漢文科の本試験に於て、一般に受験者が割に重視してゐる傾向にありながら、それ程努力を拂はず、その爲に思はぬ痛手を蒙るのが復文と漢作文とである。受験生活の経験を國漢科に持つ者は誰しも思ひ當る事であらうと思ふことは、始終その受験生活の中でこの復文と漢作文との準備が氣掛りでありながら眞の努力を拂つてゐないといふことである。

荷も試験場裏に臨む程の者であれば、先づ解釋に於ては少くとも一人前と云ふ自信を持つてゐる者であらう。今假に受験者の一割五分を合格者と見て論ずるに、合格圈内に今一步といふ不合格者の答案とその合格者の答案とを較べて見たら、解釋方面の得點數に於てはさしたる隔りは無いであらう。更に甚しきに至つては答案面に現れた

解釋の文句、引例の歌文に到るまで殆ど同一なものが幾通もあると言ふのではないか。かく考へて見る時、合格不合格の境界線近くの數人乃至十數人の者の得點數に於てはその差は實に分厘でしかないのである。かゝる事情の下に於ける我々受験者の運命を左右するものは主として此の復文と漢作文の出來不出來なのである。然らば設問は如何？ といふ問題が起るのであるが、抑、文檢國漢科に於ける設問は、受験雜誌や單行本等の上で大聲に論じ立てられてゐる程の大問題では無い。この事は昭和八年の某雜誌に載せられてゐた委員の談によつても明かである。即ち「設問の研究といつて、仲々大掛りな研究をしてゐる様に聞くが、文檢に於ける設問は別にそんな準備までせなくともよい。唯平生見る文學書中の事項を記憶してゐたらよい。」大體こんな意味の話が出てゐたのを見た。然し實際の受験に當つてはそんな取とめのない漠然とした知識では覺束ないが、それかといつて大部な詳細を極めたものは見る必要はないと思ふ。平生の散漫な記憶を纏めるため、極簡単なものでよいから確實にやればよい。所

が文檢受験者の通弊として誰も彼も申し合はせた様に設問研究に多大な日子と努力とを注ぎこんでゐる。その努力は實に多とすべきではあるが、かくして得られた實力が果して分秒を争ふ受験場裏で何程の役をして呉れるだらうか。

例へば「本朝文粹」に就いて答案を作るに一、時代 二、作者 三、内容 位を書けば合格點は十分である。三の内容といつたところで「支那の文選に倣つて作つた本朝の文集」位で結構であり、又文檢程度の設問で委員の方でもそれ以上は望んではゐない筈である。この答案を平生の設問研究の該博なる知識を以て詳細に述べたところで、右の様な簡單でも要點にふれた答案よりいくら良い點が得られようか？

再びいふ設問の研究は簡單な表に近い程度の準備書によつて淺くともよいから確實に自己のものとするだけで十分である。然して餘力をこの復文作文の研究に傾注すべきである。

設問の一問を失敗するのと復文の一問を失敗するのと何れがどうか、といふことを

考へて見るとよい。設問は唯の暗記だ、復文は漢文法の知識によらねばならぬ。文の構造が理解されてゐねばならぬ。文字の用法も解つてゐなければならぬ。読解力の根本ともなるものである。然るに受験者の一般はその準備を設問の研究の下に置いてゐる。一はより参考書が無いためと、一はこの復作文の練習といふ事が相當骨が折れるためとであらう。自分で原文を書き流しの和文に直して置いて、さてそれを射復して練習して行くといふことは、とても多大の時間と手間とを要する上に、何等系統もないため得る所は拂つた努力を償はぬ場合が多い。凡そ何事にもよらず研究に於てはこの系統があるといふこと程重大なものはない。本書はこの意味に於て、短日時の間に系統ある文法的知識を復作文の實際練習に併せて會得する様に編纂したのである。

復文漢作文の研究は、唯應試の復作文に合格點を得るがためのみのもではない。これこそは漢文組織を理解し、読解力の根柢を確立する一大源動力となるものである。復文作文が相當に出来るやうになれば、未見の漢文に對した場合でも、それが讀解出

來ぬといふことはないやうになるのである。即漢文讀解力の眞の養成は復作文の練習からといへるのである。この事は既に古來、先儒伊藤東涯、皆川淇園等によつて聲高らかに唱導せられてゐることで、何も事新らしい意見ではないが、今も猶その言葉の價値には何等變りのない言である。

復作文の練習は復作文のためのものだけでなく、漢文讀解力養成上ゆるがせにしてはならぬ重大問題であることを再び繰り返していふ。準備の等閑にされ勝ちであるこの復作文の研究練習こそ、國漢科征服の新らしい鍵なのである。

2 復文の實力を養成するには

復文の實力を養成する秘訣？一言にして言へば「文法に立脚した倦まざる練習」である。或る指導者はいふ、唯練習によつて「こんな時にはかうするのだ」と暗記せよ。文法上より理窟をこねて理解する方法は迂遠だ、と。勿論この實際練習といふこ

とは復作文上達には缺く可からざる重要問題で、如何なる人といへどもこの效を積まないでは成功を得る譯には參らぬ。然し著者の考では、迂遠だといふその人の採る方法こそ實に迂遠だと思ふのである。文の習練は何處迄も文の法則に立脚すべきものである。面倒臭いといふ勿れ。億劫だといふ勿れ。身は合格を目指して進軍する受験者ではないか、寝ころんで本を見てゐて合格しようとは蟲がよい。棘もあれば沼もあり、谷もあれば高山もありするのが受験道の常だ。棘に恐れ、斷崖を仰いで吐息する程ならば、あつさり受験を斷念して圍碁でも圍み、講談本でも讀むことだ。

重ねていふ、復文の實力養成は根柢を文法に置くべきである、と。此の方法は成程一見迂遠の様で、時間の消費を懼れる受験者には大敵であるかに思はれるが、實はその反對で、急がば廻れである。確たる文法の基礎に築き上げられたる復文の實力こそ、やがてそのまま漢作文の熟達、解釋力の養成の偉大なる礎石とも大黒柱ともなるのである。

一例を擧げてこの次第を明かにすれば、

○鳥獸は與に群を同くす可からず(論語)
を原文に復するとするに、多く陥る誤は、

「鳥獸與不可同群」

か、或は、

「鳥獸不與可同群」

かの二つである。これは文法的に根柢力の薄弱から陥つた誤謬で、答案としても文としても共に零點で、何の取り柄もないものである。所がかゝる誤謬も一度文法的にその不可なる理由を會得すれば、二度とは陥らぬ筈である。此の復文の正しくは

「鳥獸不可與同群」

である。その理由として先づ第一に考ふべきは、

「鳥獸は……可からず」

と考へる。これが復文作文の文字布配の根本的考へ方である。そこで考察を更に一步進めて「鳥獸は何が可からずか」と考へる。こゝに於て「鳥獸は與に群を同くするところが可からずだ」となる。こゝまでくれば「與に」の一語の置き場所も、又「可からず」を「不：可」と分離してはいけない事も會得出来るのである。

又こゝに至るに文法的知識に依らないで、唯練習の效によつて、「こんな場合にはかうするものだ」、式に記憶をして置くと、往々思はぬ失敗を仕出かすことがある故、慎重に文字の布置を考察すべきである。即

○己を知らず

といふのを原文に復するに、

「不知己」

ではなくして、

「不己知」

であることを十分記憶してゐても、その理由を確かめてゐない時には、

「未之學」を「未學之」にしたり、

「不爾思」を「不思爾」にしたり、

等の誤謬を平氣でやることになる。然るに一度此の理由を文法的に理解して置けば、かゝる誤を再び冒すことはない。即

「自稱、對稱、又は指示代名詞が、打消助動詞を伴ふ他動詞の客語、又は補語となる時には、その代名詞を打消助動詞の下、他動詞の上に置く」

といふ文法の法則を頭に入れて置けば、代名詞である、己とか我とか余とか、又之とか何とかの語位を誤るやうなことはない。

著者は復文演習の實際篇に於て、誤り易き用字法、構文法等を一々練習文に就いて指適解説して、確たる實力の養成に資し度いと思ふ次第である。

3 漢作文の實力を養成するには

漢作文の實力を養成するに別に事新らしい秘法等のありやう筈はないのである。

歐陽修は作文上達の秘訣として、看多、做多、商量多の三多と、馬上、枕上、廁上の三上とを説いてゐるし、皆川淇園はその著淇園文訣に於て、更にこの外に肝要とすべき務として讀多、解多、做多の三多を擧げてゐる。

看多とに多く古今の書籍を見て、自己の文想を涵養し、文格を知り、又文材を蓄へることを言ひ、做多とは多く作文をなすことを言ひ、商量多とは自己の書きたる文章につき、字句、篇章を十分に吟味なし工夫をなすこと即ち十分の推敲をすることを言ふのである。然してこの文想を練り、推敲を重ねるに良き場所としてあげられたのが三上なのである。馬上とは路を行き／＼文想を練ることで、これは自分達にも度々経験のあることである。更に枕上とは字の示すが如く、床中に入りてより靜かに構想を

考へ廻らすことを言ひ、廁上とは廁にあるの時その想を練ることを言ふのである。

淇園文訣に擧げられた三多に就いて彼は「：：初學ノ人ニハ、此外ニ肝要トスベキ務アリ、三多ニシテイヘバ、讀多、解多、做多ナリ：：」と述べ、その理由必要を詳述してゐるが、之を簡単に述べれば「讀多は歐陽修の看多に似た仕事で、多く古今の文章を讀みて、文字の使用されてゐる型、味ひと云つた様なこと（彼の言葉で言へば『文字の鎖の貌付』）を記憶して、自己の作文の際、其時に應じて心に浮び出るやうにし、それによつて筆先を導くやうにすることであると言つてゐる。解多とは如何に多く讀みて『文字の鎖ノ貌付』を熟記してゐて、それが作文に當つて自分の神氣を導く役目をして呉れても、その文字の義理をよく理解して居らぬと書いた文は如何にも立派な漢文の型を備へてゐる様でも、文理が通ぜぬ文となる故、多く文字の義理を理解せよといふのである。又做多はこれを淇園文訣の言を貸りて示せば『多讀、多解ノ功ヲ積ムトイヘドモ、譬ベ足接タル者ノ杖ヲ蓄ヘタルガ如クニテ、文章ヲ書ク爲ノ役ニ

ハ立タヌモノ』であるから、多く作文をなし『心ヨリ條理ヲ付ケテ、辭ヲ作り出スコトヲ爲習』ふて、筆を舒す様にせよと説いてゐる。

右二家の説共誠に要を得た説で、吾等の大いに参考として學ぶべきことである。

然し吾々の復作文研究の目的は、少くとも目下の所では、文章家に成らうとするにあるのではなくして、讀解力の基礎を養成すると共に、合格圏を突破するに十分な作文力を養成するにあるのである。故に右の如き説は参考として心に存して活用し、實地の演習として先づなすべきは文法的なる射復文の法である。射復するとは今云ふ復文のことである。如何に良い漢文を作らうと思つた所が、文字の布置、用法、性質とか、文の構造とかを會得してゐなくてはたうてい望み得ぬばかりでなく、文らしい文も出來得ぬのである。立派な文想、文章觀はあつても、いざ筆を執つて紙面に對つた時、書きあらはすべき方法——漢文の法則を知らなければ漢文は書き得られぬ譯である。

漢作文の上達第一階段は、取りも直さず射復文の修練に俟たなければならぬ。即復

文の上達こそ、作文上達の秘法であり、この上もない捷徑であるのである。射復文の演習に依つて十分に文の構成、文字の性質、用字の法等を我物として居れば、或は與へられたる題目の下に、或は自由な題目の下に自己の思想を漢文として表現して行く事は容易な業である。文法に立脚した復文力、それが自由な型に於て思想發表の機關となつて漢作文の力となるのであつて、復文力の養成は漢作文の生命の糧である。その糧を以て自己の文想を養ひ、文章を表現するのである。即漢作文と云へども決して別種のものではなく、この復文力の活用と自己の文藻とより織り成されるのである。その想は、各人各様の文才により又文章觀によることで他より貸し與へる譯には行かぬが、それは看他の效によつて養成すべきものである。

所で漢文には漢文としての構造と漢文としての臭がある。如何に良い思想内容を含めてゐたとて、表現の形式に於て缺陷があれば、それは漢文として立派な文章ではない。内容も立派だし、用字の法にも誤つてゐないし、一篇の結構も良い文章こそ良

文といはれるものである。しかし文検程度では、かゝる優良なる文章は望めぬことだし、又委員の方だつてそんな優良文などの出現は一般的に待望してゐないだらうと思ふ。受験作文として最も大切なことは、内容的によりもむしろ形式的の用字法の上にあらうと思ふのである。まして近來漢文力の低下を口ぐせの如く歎かれる受験者の學力からして、そんな優秀文の出現は望まれぬ。我等は優秀文を目指すより、先づ第一番に漢文としての用字法、文の結構とを研究し、正しい漢文を書くことに努力を拂ふべきであると思ふ。その方法としては、所謂復文の練習の效を積み、更に長篇文の復文即古來の模範的文章の射復を演習し、以て用字、文格の大意を會得し、最後に一定の題目によつて自己の思想の表現に終るのである。

即漢作文の實力養成の方法は、文法に立脚せる復文の研究にその總てがあるといつてもよいとさへ考へるのである。

4 受験場に於ける漢作文の實際とその心得

問題用紙が配布されると、誰もが先づ一と通り問題全般を通覽する。最後に目を通すのが作文の問題である。ところが——經驗のある者は誰しもさう思ふだらうが——その作文の題目が始終頭の中にこびり付いてゐて何彼と運筆の邪魔をする。これは作文が我々にとつて一の恐懼であるためではあるまいか？ 受験場に足を入れるまでに、漢作文は一と通りは先づ書ける、と云ふ自信がないためだ。その場になれば何とかなるだらう位な考で受験場に入る者が受験者の大半ではあるまいか。既に述べた如く最後の決を定めると考へらるる漢作文に對して、そんな事でどうして合格の確實性があるものか。

そして大抵の人が、復作文は解釋、設問を片付けた後の、ある程の餘つた時間で書くやうである。最後に書くといふことはよいとして、ある程の餘つた時間ではどうし

ても漢文らしい文は書けない。ある程でなく、あ、ら、せ、た、時、間、とせねばならぬ。意識して時間を餘さねばならぬ。如何に解釋が重大だからと云つたとて、時間の大部分をそこへ當てる、僅か三十分や一時間で、大切な漢作文に對してしまふのでは合格は覺束ない。一問や二問の解釋が十全であるよりも、作文が相當に出来てゐた方がよつぽどよい。著者の場合を参考に述べて見ると、四時間半の時間中、讀解、設問を二時間半で終り、後の二時間即殆ど全時間の半分近くを作文に當てたのである。三百字以内といふ限定のある文だ。多過ぎるのもよくないし、といつて短いのもよくない、書き上げて調べて見たら三百九字あつたので、再三推敲を重ねて二百九十八字に纏めた。此の字數限定の作文に對して我々の取るべき態度は如何といふに、百字や百七十字ではその漢文力を疑はれるといふ缺點がある上に、事實我々の力として字數がかく少いもので「相當だな」と思はせる文は書けぬ譯である。で先づ二百五十字前後といふ所が一番素直なところではないかと思ふ。平素復作文の研究に餘り力を入れてゐない者に

は、僅かな時間、に二百五十字の作文は一寸つらい。少し書きかけるともう書くことが無くなる。これではならぬと、一句加へ三句加へして先づ相當な長さに作り上げて見るが、一貫した文脈も怪しいはゞ漢字の多く並んだ物を生産したことになり、受験應試の文章としてどれだけの役割を演じて呉れるだらうか？ 復作文の不成績は、讀解上に於ける一字や一句の誤謬と違つて全文が文として成立せぬのである。従つてその痛手は相當大きいものと見ねばならぬ。著者が先に復作文の出来不出来が合格不合格を決定する鍵といつたのはこのことである。矢張り不斷の努力だ。面倒がらずに倦まずにコツツリ／＼と進む努力だ。

次に作文の實際の書き方であるが、いきなり漢文で書き出す法と、一度漢文直譯體の和文を作り、それを射復して行く法との二法がある。前者の法は相當その道に練達した者でなければ出来かねる事であるし、又もし我々がその方法に據つたにしたところ、可成なものを作り上げる事は時間の制限を受ける受験場に於ては損なやり方で

あらう。我々のよるべき方法は後者、即漢文直譯體の和文を作成して、それを射復して行くといふ法が無難であり且容易であると思ふ。ところが此の際特に留意すべき事は所謂倭習又は和臭といはれてゐる事についてである。倭習とは読んで字の如く漢文中に混入する倭人の習、即ち漢語でない語、日本語を文中に織り込んで作文することである。形は漢文でもそれは純粹なる漢文でなく、英語で言はれるビジョン・イングリッシュなのである。著者の應試の作文にもこれが二三あるから、後に指摘して參考に供し度いと思ふ。

又目標は合格にある作文だ。少しでもよく見てもらはねば駄目である。推敲を十分にせねばならぬことは勿論であるが、又文中に一二句位四書中の文句を挿入することが大切である。殊に文の冒頭とか結びとかに適切な一句を用ゐることは、徒應試文のみならず一般作文にしても緊要なことである。文に品が出来る。文に深みが出る。何處となく漢文らしい味が出て来る。とは云へ、これも程度問題であつて、無暗に引

用したでは文としての個性も文格も失はれてしまふ譯だ。せい／＼引用句も三句位に止める位であらう。

こゝでは稍餘談にわたるが、作文引用の関係もあるから一言付加へて置き度いと思ふことがある。論語本文の研究の一事である。四書の内でも論語は又その中心となるものである。論語の文句は暗記するやうな考で繰返し繰返し讀むべきである。その内容と共にその語法も漢文中の上々と言はれてゐる所であるから、漢文の文格、用字法を理解會得するにはもつて來いの良書なのである。著者は解釋研究を了つた後は、岩波文庫本武内博士校註の論語（四十錢）を常にポケットに入れてゐて、それこそ本當に暇さへあれば時と處とにはおかまひなしで、幾回も幾回も反讀したのであつた。この研究は非常な効果があつて、他本の讀解上に、又復作文演習の上に多大な利益を得た。特に主眼點を論語の用字法の上に置いて何故この以字はこゝに置かれてあるか、何故この不字はこゝにあるか等をが、つてんの行くまで考察することである。それ位研

究して行けば作文の際の引用語句など特に抜き書きなどして暗記する様な機械的な勞力を拂はないでも、自然に口を突いて出て来るものである。

次に作文するに當つての文字であるが、勿論俗字や當字は使用せぬがよいし、出来れば全文中に一字や二字位は、一寸氣のきいた文字の使用があればその文の品が出来て来るものである。が、いざ實際——殊に時間の拘束のある上に辭書等の見られぬ受験場では、文字まで一々吟味出来かねる事で、見らるゝ通り著者の應試文もあの通りの平凡な文字ばかりになつてしまつた。文字の記憶など解釋に追はれて誰しも等閑に付し易いが、平生心掛くべき重大問題である。これは唯作文のためのみならず、亦資格を得て中學の教壇に立つた時の問題でもある。とは云へこの文字の記憶は仲々實行出来かねることであるが、然し勝利者は常に他人の實行し得ぬ所、實行し兼ねる所を堪忍んで遂行する者である。努力には苦痛が伴ふが、苦痛に打ち勝てば愉悅の境地に入り得るのだ。試験は戦だ。怠惰は敗軍に導く——忍べ、堪へよ、たゞ進め。

第二章 漢文の構造

一 文構成の基礎

復文作文を行ふ場合に文の構造、用字法等が解つてゐなくてはそれは出来得ぬことである。如何に語句を豊富に記憶してゐ、如何に勝れた文藻を持つてゐるにしても、漢文として表現することは出来ないのである。復文作文の演習を行ふに當り、先づ文の構造、語法の大略を豫備知識として備へねばならぬ。以下項を逐うてその大概を述べる。

◇單語

國文と同じく文を構成する基礎は單語である。更に細く別けたらそれは文字であるとも云へるが、本書の目的として文字の事は論じない。この單語をその性質用法等によつて左の十種の品詞に分つ。

名詞。代名詞。動詞。形容詞。副詞。助動詞。前置詞。後置詞。接續詞。
助詞（終尾詞）。感動詞。

又、これ等の品詞が文を構成する場合には又各々の性質によつて、主語、述語、修飾語、補充語等となる。

◇主語

主部の中心主體であつて、一文の主題となつてゐる語であり、名詞、代名詞、名詞句等が主語となる。

月出。

有山。

逝者如斯夫、不舍晝夜。

大聖孔子、教人不倦。

◇述語

述部の中心主體であつて、主語に對して叙述をなす立場に對立する語であり、述語となる品詞は、動詞、形容詞、助動詞等である。

海廣。

山高。

月明、星稀。（以上形容詞）

我讀書。

彼登山。

烏鵲南飛。（以上動詞）

讀書須百遍。

我能可爲之。

至誠而不動者未之有也。（以上助動詞）

◇修飾語

他語の意義の運用を修飾する語である。他語の意義の缺陷を補充するものではなく、唯その叙述を一層詳密ならしめるために付する語である。故に修飾語なくとももとの文意は成立するものである。補充語たる客語（補語も）を此の修飾語の中に一括する説もあるがそれは兩者の本質を辨へぬ仕方である。修飾語には形容詞的修飾語と副詞的修飾語との二種がある。

(イ)形容詞的修飾語

文中にある體言の上について、その意義を修飾する語をいふので、主語にも補充語（客語・補語）にもつくものである。普通體言に連る所からして連體語と呼ばれてゐる。

洋々大河。

河陽軍節度使御史大夫烏公。（以上主修）

兄讀新修百科辭典。（客修）

天子賜老將軍勳章。（補修）

(ロ)副詞的修飾語

文中の用言、又は文全體に添うて其の意義の運用を修飾する語をいふ。原則として形修と共に被修飾語の上に置く。

博學而篤志。

月明星稀、烏鵲南飛。

汎愛衆親仁。

清風徐來、水波不興。

顏淵死。門人厚葬之。

人情已厭南中苦、鴻雁那從北地來。

雖春來花未開焉。（主語を隔て、述語を修飾するもの）

◇補充語

修飾語と違つて他語の意義の缺陷を補充する語をいふ。これは普通云はれてゐる客語と補語とを一括して言ふのである。前にも言つたやうに之を修飾語の一種であるとするのはよくない。修飾語は全々取り除いても文のもつ意味は成立するが、補充語たる客語・補語は取り除かれたならば文の意味は成立せないのである。この二者は明かに區別せらるべきである。

孔子讀易。(他動詞の目的語)

目不視惡色。耳不聽惡聲。(同)

季康子問政於孔子。(以上客語)

子曰、志於道、據於德、依於仁、遊於藝。

孟子去齊。(自動詞の目的語)

親恩深於海、高於山。(形容詞の標準語)

質勝文則野、文勝質則史。(以上補語)

◇熟語

異なる語が相結合して、新しい一觀念をあらはせるものを熟語とい。熟語も亦文構成に重大な役目を有する一單位である。

平原。戰亂。將軍。流星。凱旋。

◇連語

二つ以上の單語が連続してゐて、單語や熟語ではなく又句や文にもならない新生の語を連語といふ。又文の要素たり。

高山。正々堂々突撃せる將軍。

◇句

文が獨立を失つて他に從屬し、他の文の一部分となつてゐるものを句といふ。ただし從屬の羈絆を脱すれば立派なる單文となり得るのである。元來句といふのは局の意であつて、文中に語を連ねて一句をなせるものとの意である。

柳^{ハナリ}緑^ニ花^ニ紅^ニ。

山^ツ高^ク、水^シ長^ク。

月^チ落^チ、烏^イ啼^ク、霜^シ滿^ル天^ニ。

二 單文・復文・重文

◇文

一つの語により又は一つ以上の語の結合により一個の完全な思想を表出せるものを文といふ。文はその成立の形式よりこれを單文・復文・重文等に別つことが出来る。

◇單文

主語と述語との関係が唯一回成立してゐるものである。

花^{ハナ}咲^ク。

沛^{ハク}公^ノ軍^ヲ覇^ス上^ニ。

吾^ガ日^ニ三^ニ省^ス吾^ノ身^ヲ。

葉^{ハク}公^ノ問^フ孔^ニ子^ヲ於^テ子^ノ路^ニ。

光^{クワ}陰^{イン}如^ク白^ク駒^ト。

難^ガ乎^カ。免^ル於^テ今^ノ之^ノ世^ニ矣^ト。(以上、主語一、述語一)

我^ガ買^フ本^ヲ、買^フ筆^ヲ、買^フ紙^ヲ。

士^ノ見^ル危^ク致^ス命^ヲ、見^ル得^ル思^フ義^ヲ、祭^ス思^フ敬^ヲ、喪^ス思^フ哀^ヲ。(以上主語一、述語二以上

のもの)

◇復文

又連文とも云はれてゐるものにして、單文がその文中に一つ以上の句を含んでゐるものを言ふ。言ひかへたら一つの主句と一つ或は一つ以上の屬句とより成れるものである。

有事^レ弟子服其^レ勞。

花咲^レ庭美。

水清^レ魚不^レ棲。

◇重文

二つ以上の單文が接合して、新たなる一文を構成せるをいひ、接合上に於ける二文の資格は對等的で、主從的關係はない。

柳^レ綠、花^レ紅。

山^レ高、水^レ清。

君^レ恩重、我^レ身輕。

君^レ使^レ臣、臣^レ事^レ君、如^レ之何。

居^レ移^レ氣、養^レ移^レ體、大^レ哉^レ居^レ乎。

月^レ明、星^レ稀、烏^レ鵲^レ南^レ飛。

三 主語・述語より成る文とその語順

(イ)山高^シ。月白^シ。魚泳^グ。正成^ス戰死^ス。花笑^フ。

(ロ)山高^ク。月白^ク。水落^チ石出^ツ。心廣^ク體胖^{ナリ}。

【解説】(イ)の例文は單文。(ロ)の例文は重文。

この種の文、即ち主語と述語とより成れる文が漢文の基礎的な型式で、複文にせよ何にせよその根柢はこゝにあるのである。故に讀解に當つて難文に出喰はせた時は、いづれが主語でいづれが述語かを早く見定める事が大切である。この事は復作文の實際に當つても亦心せねばならぬことである。

【語順】 主語——述語

四 主語・述語・客語より成る文とその語順

兄^レ讀^レ書。妹^レ彈^レ琴。子^レ張^レ問^レ善^レ人^レ之^レ道。子^レ張^レ問^レ政。樊^レ遲^レ請^レ學^レ稼。回^レ也。

問一以知十。

【解説】 述語が他動詞でそれのみにては敘述を完全に表はすことが出来ぬ場合には、客語を以て不完全なる敘述を補充するのである。「兄讀」では何を讀むのか不明であり且敘述は不完全である。「兄讀書」として始めて完全なる一箇の文となるのである。

【語順】 主語——述語——客語。

五 主語・述語・補語より成る文とその語順

門臨水。花在梢。人在堂。大軍屯村落。孟子去齊。平原君至楚。子游爲武城宰。逝者如斯。

【解説】 自動詞が述語となつた場合、それのみにては完全に思想を表出出来ぬ時は、その不完全を補充するために自動詞の標準を表す語として補語を置くのである。

【語順】 主語——述語——補語

六 主語・述語・客語・補語より成る文とその語順

(イ)孔子問禮於老子。孟孫問孝於我。蘧伯玉使人於孔子。太公封微子於宋。古之欲明明德於天下者先治其國。

(ロ)余投之火中。余聞之先師。盡遷之邊。

(ハ)先生教弟子論語。校長授生徒卒業證書。范蠡遣大夫種書。陽貨歸孔子豚。

【解説】 (イ) 述語が補語を要する場合の基本型である。補語は述語の敘述するところが客語のみでは未だ十分に表現出来ぬ場合に置く補充語である。

【語順】 主語——述語——客語——前置詞——補語

(ロ) 「客語が代名詞の場合は補語に前置詞を要せぬ」といふ原則に依るものである。注意すべきものである。

【語順】 主語——述語——客語——補語

(ハ) 【語順】 主語——述語——客語——補語

此の種の語順は(ロ)の語順と共に十分注意記憶すべきものである。この變則語順を生ぜ

しめる原因は、述語の持つ意味によるものである。即ちこの種の語順を生ぜしめる述語は大抵與奪の意味を持つてゐるものである。その場合は(イ)の正則語順を破つて右の如き變則的語順となるのである。その動詞の主なるものをあげると、與。送。贈。遺。歸。授。賜。奪。教。問。告。

此の形式は復作文の際、慎重に考慮して誤らぬやうにせねばならぬ。又白文訓讀の時に於ても注意すべきものである。

七 語順の轉換せる文

右に述べた如く漢文構成の語順は、

主語——述語。 述語——補充語(客・補)

となるのが原則であるが、特殊なる述語(有とか無)とかのため、又は作者の特別な作文目的によつてその語順が本来のものと轉換してゐるものが可成ある。即ち言はんとする所を強調せんがために、「主—述」とあるべきを「述—主」としたり、「述—

客」とあるべきを「客—述」等とその語順を轉換して前に提示し、讀者の胸に強くうつたへ、又自らの意を明かに表出するものである。總てこの種の語轉は修辭上の技巧で、文の平板を避け力強き文格とするのである。復作文上亦重要な一項目である。

(A) 「有」「無」が述語となる場合。

「有」「無」が述語となる場合には、「主—述」の語順原則を破つて、「述—主」となるのである。

有朋自遠方來。

有聖人存世人心。

有顏回者。

有酒無殺。

無我無人、天下唯一空。

有恒產者有恒心、無恒產者無恒心。



【語順】 述語——主語

(B) 疑問文の場合

疑問文にありて、特にその疑問の意を強調せむとする時には語順を轉換せしめて、述部を主部に先行せしめるのである。

誰歟、創此禍者。 || 創此禍者誰歟。

何乎、爾所謂達者。 || 爾所謂達者何乎。

【語順】 述語(述部)——主語(主部)

(C) 咏嘆文の場合

疑問文の場合と同じく、その咏嘆の強調のため語順を轉換するのである。

大哉言乎。 || 言乎大哉。

君子哉蘧伯玉。 || 蘧伯玉君子哉。

嬰鑠哉是翁。 || 是翁嬰鑠哉。(以下略)

惜乎、夫子之説君子也。

曾子曰、堂堂乎張也。

固哉、高叟之爲詩也。

巧言令色鮮矣仁。

有心哉繫乎。

大哉孔子、博學而無所成名。

甚矣吾衰也。久矣吾不復夢見周公。

【語順】 述語(述部)——主語(述部)

(D) 韻文の場合

韻文の場合に、平仄や押韻の関係やで語順轉換は屢ば行はれる。理由は何にせよ書かれた文として見た時は、彼の疑問咏嘆の文と同じく、叙述の強調を表はし、明瞭な印象を與へる効果は十分にある。たゞし平叙文にあつてはかゝる語

順は殆ど無い。

古木鳴寒鳥、空山啼夜猿。

機中織錦、秦川女。

【語順】 述語——主語

(E) 述語、客語の轉換せる場合

述語——客語。の語順を轉換して、客語——述語とするのは、作者が特に讀者の注意を此の客語に集中せしめんがためにするのである。此の語順轉換には左の四つの場合がある。

(イ) 之字を客語の下に加へるもの

子曰、古者言之不出、恥躬之不逮也。

|| 子曰、古者不出言……

庸德之行、庸言之謹 || 行庸德、謹庸言。

父母唯其疾之憂 || 父母唯憂其疾。

博愛之謂仁、行而宜之之謂義。

賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘。

天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。

盈科而後進、放乎四海、有本者如是、是之取爾。

【語順】 客語——之——述語

(ロ) 是字を客語の下に加へるもの

君人者將禍、是務去。 || 務去禍

對曰、老夫其國家是不能恤。 || 老夫不能恤其國家。

詩書禮樂是習、仁義是修。 || 習詩書禮樂、修仁義。

【語順】 右に同じ。

(ハ) 於字を用ゐたるもの

諺所謂、室於怒、市於色者、亡於不暇。

(ニ) 之、是、於字等を用ゐぬもの

非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言。 || 勿視非禮、勿聽非禮、勿言非禮。故舊不遺則民不偷。 || 不遺故舊則民不偷。

【語順】 客語——述語

(ホ) 客語が代名詞で打消助動詞の下に来るもの

打消の助動詞下に、述語と客語とが置かれた場合には、述語と客語との語順は轉換する。語順轉換中注意すべき一で、復作文上特に留意せぬと、知つてゐながらも猶且誤るものである。

軍旅之事、未之學也。

子路有聞、未之能行、唯恐有聞。

子曰、不患人之不己知、患不知人也。

子曰、莫我知也夫、子貢曰、何爲其莫知子也。

唐棣之華、偏其反而、豈不爾思、室遠而子曰、未之思也夫、何遠之有、不好犯上而好作亂者、未之有也。

【語順】 打消——客語(代名詞)——述語

(ヘ) 疑問代名詞が客語、補語となれるもの

子曰、内省不疚、夫何憂何懼。

子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉。有牽牛而過堂下者、王見之曰、牛何之。

子路宿於石門、晨門曰、奚自、子路曰、自孔氏。

君子之道、孰先傳焉、孰後倦焉。

【語順】 客・補語(疑問代名詞)——述語

(ト) 補語、副修語と述語との語順轉換せるもの

凶服者式之、式負版者。

瓜田不納履、李下不整冠。

危邦不入、亂邦不居。

(チ) 以字による語順轉換

以字を客語の前置詞又は後置詞として、特にその客語を述語の前に提示強意せるもの。總てこれ等は皆、客語其ものの存在價值を高揚する爲である。

子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之、君子哉。

曾子曰、不可、江漢以濯之、秋陽以暴之、皜々乎不可加已。

子曰、君子義以爲上。

仁以爲己任、不亦重乎。

右の例は、以字を後置詞として伴ひ、語順を轉換したものである。

是故以天下與人易、爲天下得人難。

子謂南容、邦有道不廢、邦無道免於刑戮、以其兄之子妻之。

子謂公冶長、可妻也、雖在縲紲之中、非其罪也、以其子妻之。

右の例は以字を前置詞に伴ひて客語を述語に先行せしめたものである。本來なれば左の如くする。

與人天下。

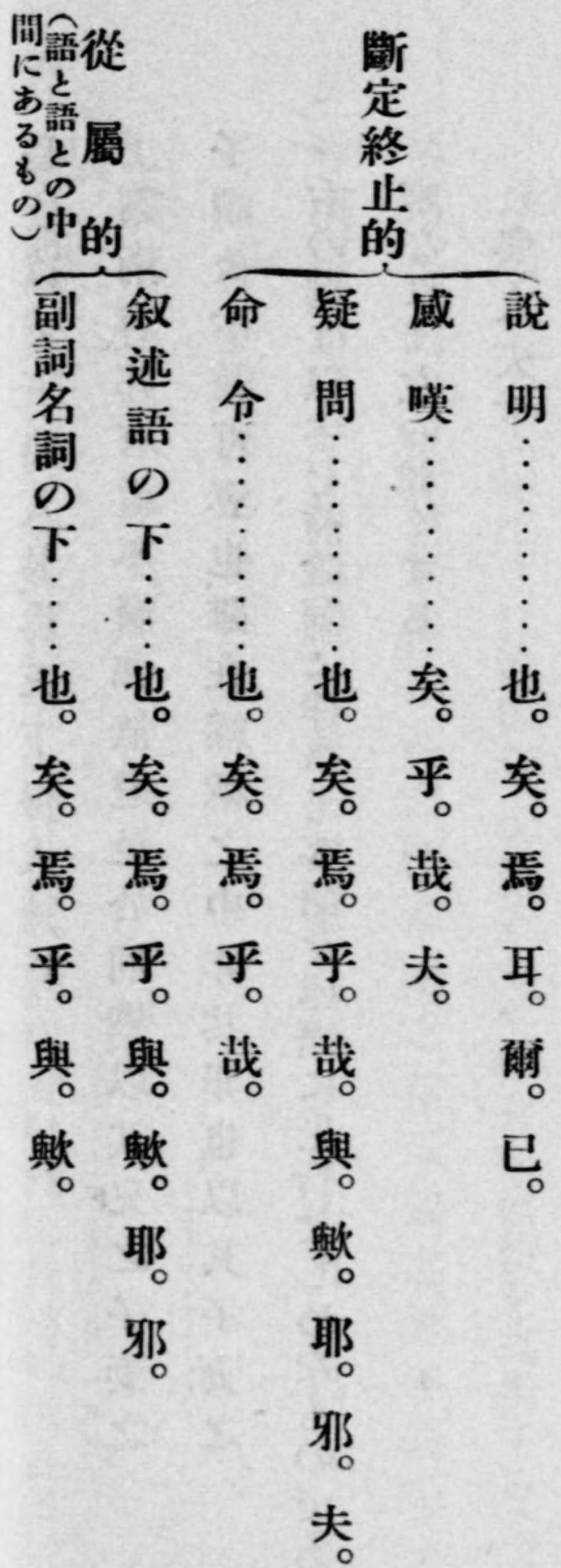
妻其兄之子。

第三章 助詞(助辭)の性質とその用法

一に終詞又は終尾詞とも稱せられてゐるもので、語句に附屬して文を終り、或は語と語との中間に入つたり、又動詞なき時には動詞ともなる品詞である。その機能としては、感嘆、疑問、反語、斷定、假定、推量、呼掛け、時の過現未等をあらはす働を

する。之を大別して断定助詞、疑問助詞、感嘆助詞とも云はれてゐる。然し疑問助詞がその用ひ場所によつては又感嘆助詞ともなり、断定助詞も亦疑問、感嘆の助詞ともなるのである。漢文に於て此の助詞の任務は實に大きいもので、讀解の上から言つても、復作文の上から言つても十分に研究せらるべきものである。

左に此の助詞の部類別を表示して、以下各文字の性質と用法を古文の實例を擧げて説明することとする。



喚呼的
(呼掛け)

……也。矣。哉。乎。

(此の分類は松下博士の説による)

「也」の性質と其の用法

(イ)現在終止的用法(説明的)

矣、よりも、語勢が緩である。上に「是・即・未・非」等を置いて呼應すると多し。

光陰百代之過客也。

朽木不可彫也。

穀城山下黃石即我也。

汝身非汝有也。

既欲其生、又欲其死、是惑也。

吾未之聞也。

(ロ)疑問的用法

何、誰等の疑問代名詞と共に疑問助詞となる。

鄰國之民不加少、寡人之民不加多何也。

我之不賢與、人將拒我、如之何其能拒人也。

(ハ)命令的用法

子路問事君、子曰勿欺也、而犯之。

(ニ)從屬的用法

語と語の中間に用ひられて、下へ從屬する語の下に用ひてその意味を再現する。

孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也。

詩云、娶妻如之何、必告父母。信斯言也、宜莫如舜。(以上叙述語の下)

(假定法)

子曰、聽訟吾猶人也。必也使無訟乎。鄉也吾見於夫子而問知、好勇不好學其蔽也亂。好剛不好學其蔽也狂。(以上副詞・名詞の下)

(ホ)喚呼的用法

喚呼態名詞の下に用ひてその意義を強調する。

子曰、由也、女聞六言六蔽矣乎。

子曰、賜也、非爾所及也。

主語に添ふて強調するもの

道也者不可須臾離也。

中也者天下之大本也。和也者天下之達道也。

(ヘ)事物を列舉する時(歴數の辭ともいふ)

天下之達道五、君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。

鬼無聲也、無形也、無氣也。

「矣」の性質と其の用法

断定、推定としては也より意迫つて力強いのであるが、用法は殆ど同じい。たゞ右の如き喚呼的用法、歴數の辭等に用ゐられない。過去を表はす場合は

既・已・則・嘗……………矣

となること多く、未來を表はす場合は

則・斯……………矣

となること多し。

(イ)過去及未來的用法

吾既得聞命矣。

至則行矣。

吾嘗終日而思矣、不如須臾之所學也。

俎豆之事、嘗聞之矣。(以上過去)

文献足則吾能微之矣。

子曰、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣。

如有復我者則吾必在汶上矣。(以上未來)

吾敬聞命矣。

この例はこのまゝにては過去とも未來とも讀まれる。前後の關係によつて判斷すべきである。

(ロ)断定推定的用法

也より更にその意強し。

子曰、過不改、是謂過矣。

百畝之田、無奪其時、數口之家、可以無饑矣。
亡而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、難乎有恒矣。

(ハ)命令的用法

韓信謝曰、先生且休矣、吾將念之。

(ニ)疑問的用法

克伐怨欲不行焉、可以爲仁矣。

子張問於孔子、何如斯可以從政矣。

(ホ)感嘆的用法

甚矣吾衰也。久矣吾不復夢見周公。巧言令色鮮矣仁。

噫嘻亦太甚矣、先生之言也。

(ヘ)從屬的用法

子曰、苟志於仁矣、無惡也。

昇^{リッ}彼^ニ虛^ヲ矣、以望^ニ楚丘^ヲ矣。

(ト)喚呼的用法

「ヤ」とよむ。

王曰、大哉言矣、寡人有疾、寡人好勇。

子曰、不有祝鮀之佞、而有宋朝之美、難乎免於今之世矣。

「焉」の性質用法と「也」「矣」との異同

『なり』とは讀まないが、也、矣、と同じく終詞に用ゐらる。也、矣に比して「也」は意平に、矣は意直に、焉は意揚る」と説かれてゐる。即ち冷靜な平調で、矣は急促な調で、焉は悠揚たる高調である。

(イ)過去の用法

孔子曰、殷有三仁焉。

子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉。

蓋二客不能從焉、劃然長嘯、草木震動、山鳴谷應、風起水湧。

(ロ)未來的用法

無罪歲、斯天下之民至焉。

子曰、素隱行怪、後世有述焉。

(ハ)強意的終止用法(斷定的用法)

文末に添へて語勢を揚げるためのもの。右の(イ)(ロ)も共に多分にその傾向はあるが、特に時(過去未來)に關はらずたゞ意を強よめるための役のもの。

致中和、天地位焉、萬物育焉。

人之其所親愛而辟焉、之其所賤惡而辟焉。

夫婦愚可以與知焉。

今夫天斯昭昭之多、及其無窮也、日月星辰繫焉、萬物覆焉。

右の用例を見るに於是、於此の意味のものである。復作文上に参考とすべきである。

(ニ)疑問的用法

子曰、予欲無言。子貢曰、子如不言則小子何述焉。

既庶矣、又何加焉。

【註】

衛公孫朝問於子貢曰、仲尼焉學。

の類の焉は助詞としての用法では無い。これは疑問代名詞としての用法故こゝには除く。

(ホ)命令的用法

孟子之後喪踰前喪、君無見焉。

(ヘ)從屬的用法

東都雖信多才士、朝取一人焉、拔其尤、暮取一人焉、拔其尤……。

「乎」の性質と其の用法

(イ) 疑問的用法

爲人謀不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。

既焚。子退朝曰、傷人乎。

齊宣王問曰、齊桓晉文之事、可得聞乎。

管仲晏子之功、可復許乎。

且子食志乎、食功乎。

客亦知夫水與月乎。

(ロ) 反語的用法

學而時習之、不亦說乎。

孔子曰、才難、不其然乎。

子曰、愛之能勿勞乎、忠焉能勿誨乎。

(ハ) 命令的用法

聊以吾子之行卜之也。董子勉乎哉。

(ニ) 感嘆的用法

惜乎、夫子之說君子也。

王曰、善哉言乎。

惜乎、今之世愚未見其人也。

他の感動詞の下へも用ゐる。

子曰、由也女聞六言六蔽矣乎。

子遊爲武城宰、子曰、女得人焉耳乎。

子謂伯魚曰、女爲周南召南矣乎。

武侯浮西河而下、中流顧而謂吳起曰、美哉乎山河之固、此魏國之寶也。

(ホ)從屬的用法

接續的に用ゐられしものにて、「然らば」の意を含むもの、「や」と讀んで下の語に附いて意義を提示するもの等である。

子曰、由也果、於從政乎、何有。

子曰、能以禮讓爲國乎、何有。

政令於是乎成。

古之人有云、仕不爲貧、而有時乎爲貧、謂祿仕者也。

欲勿言乎、則恐其殺其主。

(ハ)喚呼的用法

子曰、參乎、吾道一以貫之、曾子曰、唯。

召文子曰、變乎、吾聞之、喜怒以類、鮮。

軾乎、吾懼汝之不外飾也。

「哉」の性質と其の用法

哉は本來咏嘆的に用ゐられるのであるが、又疑問、命令、稀に從屬的にも使
用せられてゐる。

(イ)感嘆的用法

子產曰、得其所哉、得其所哉。

子曰、直哉、史魚、邦有道如矢、邦無道如矢。

君子哉、蘧體玉。

中流顧謂吳起曰、美哉、山河之固、魏國之寶也。

大哉、孔子、博學而無所成名。

固哉、高臾之爲詩也。

群居終日、言不及義、好行小慧、難矣哉。

(口) 疑問の用法

何哉、君所謂踰者。

今閑之於草書、有旭之心哉。

故必復有賢者、而後可以死、彼管仲何以死哉。

(ハ) 反語的用法

民欲與之偕亡、雖有臺池鳥獸、豈獨能樂哉。

子曰、觚不觚、觚哉、觚哉。

撫劍疾視曰、彼惡敢當我哉。

吾之不遇魯公、天也。臧氏之子焉能使予不遇哉。

彼汲々於名者、猶汲々於利也、其間相去何遠哉。

(ニ) 命令的用法

嗣王戒哉、祇爾厥辟。

(ホ) 重用的用法(感嘆)

子貢方人、子曰、賜也賢乎哉、夫我則不暇。

子曰、鄙夫可與事君也、與哉。

增不去、項羽不亡、嗚呼、增亦人傑也哉。

力能誅羽、則誅之、不能則去之、豈不毅然大丈夫也哉。

子曰、群居終日、言不及義、好行小慧、難矣哉。

「與」の性質と其の用法

終詞として種々用ゐられ、歟と同じである。いづれかと言へば、歟の方は、與の方より意明かなり。

(イ) 疑問的用法

孟子曰、王之所大欲、可得聞與。

子曰、賜也、女以予爲多學而識之者與、對曰、然、非與。

子非三閭大夫與。

(ロ) 反語的用法

國君進賢如不得已、將使卑踰尊、疏踰戚、可不慎歟。

君求與之友、而不可得也、而況可召與。

(ハ) 感嘆的用法

子曰、無爲而治者、其舜與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣。

孝悌也者、其爲仁之本與。

古之所謂鄉先生歿而可祭於社者、其在斯人歟、其在斯人歟。

(ニ) 重用的用法

子曰、片言可以折獄者、其由也與。

人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也與。

(ホ) 喚呼的用法(感嘆的意を含む)

或問子產、子曰、惠人也、問子西、曰、彼哉、彼哉。

「邪」の性質と其の用法

「邪」「耶」は通じて用ゐられる。

(イ) 疑問的用法

彼佛者果何人哉、其行事類君子邪、小人邪。

生之志、蕲勝於人、而取於人邪、將蕲至古之立言者邪。

余甚惑焉、儻所謂天道是耶、非耶。

君子聞譽亦以爲喜耶。

(ロ)反語的用法

吾畏死耶。

疇昔之夜、飛鳴而過我者、非子也邪。

夫人之立功、豈不期於成全邪。

(ハ)感嘆的用法

疑ひてその實詠嘆するもの。

嗚呼、其信然邪、其夢邪。

嗚呼噫嘻、時耶、命耶。

「夫」の性質と其の用法

(イ)感嘆的用法

子曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。

子謂顔淵曰、用之則行、舍之則藏、唯我與爾有是夫。
重用せるもの

子曰、莫我知也夫。

子曰、未之思也夫、何遠之有。

鳳鳥不至、河不出圖、已矣夫。

子曰、苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫。

「耳、爾、已」の性質と其の用法

何れも決定の終詞として用ゐられるもので、前言を指して「それだけである」「それまでのことだ」といふ意を表はす。「耳」「爾」は同音で同じである。「已」も似た音で同義である。

「耳」の用例

狡兔僅得免其死耳。

王曰、寡人非能好先王之樂、直好世俗之樂耳。

前言戲之耳。

夫南面而聽天下其所託重而恃力者相與將耳。

梁惠王曰、寡人之於國也、盡心焉耳矣。

對曰、不敢請耳、固所願也。

執事之用韓愈、哀其窮、收之而已耳。

(一字のものはその意軽く、二字三字重用のものは意緩くして重し)

「爾」の用例

子唯謹爾。

所欲與之聚之、所惡勿施爾也。

此吾昔日之言爾。

司諫七品官爾。

「已」の用例

如有所立卓爾、雖欲從之、未由也已。

能近取譬、可謂仁之方也已。

雖欲無王、不可得已。

可謂好學也已矣。

王亦曰、仁義而已矣、何必曰利。

第四章 表格語法

本章に於ては格を表はす語法の研究をして見る。格を表はす語法には各種の名稱、分類があるが、こゝには左の十四種について研究して行くこととする。この表格語法は復文、特に作文に於てはゆるがせにならぬ大切なものであるから十分會得せられ度

い。然して讀解研究中に於ても常に表格語法に留意し、本章と連絡して研究を進めたら、その收穫は少くはないものと信ずるのである。

- (a) 受身格語法
- (b) 使役格語法
- (c) 表時格語法
- (d) 當然、義務、豫定格語法
- (e) 比較格語法
- (f) 選擇格語法
- (g) 反語格語法
- (h) 可能格語法
- (i) 比喻格語法
- (j) 假定格語法

- (k) 打消格語法
- (l) 禁止格語法
- (m) 二重打消格語法
- (n) 疑問格語法

(a) 受身格語法

受身格を作るには左の三法による。

- (1) 見、被、爲、所、爲所、遇、受等の助動詞を動詞の上に置くもの。
- (2) 於、乎、于等の前置詞を動詞の下に置くもの。
- (3) 前二項によらざるもの、語勢文意によるもの。

「見」

夫臣人與見臣於人、制人與見制於人、豈可同日道哉。(李斯列傳)
嗚呼其亦幸而出於三代之後而不見正於禹湯文武周公孔子也。

(韓愈、原道)

須賈知見欺、乃膝行入謝罪。(十八史略)

以襄美之婦人、事好色之丈夫、則身見疏賤、其子疑不爲主。(韓非子、備內)

被

爲私鬪者、各以輕重被刑。(十八史略)

以萬乘之國、被圍於趙、壤削主困、爲天下之僂笑。(史記、魯仲連列傳)

爲

王始不往。見讓而往。往則爲禽矣。不如遂發兵反。(史記、魏豹列傳)

公子光謂吳王曰、彼伍胥父兄爲戮於楚、而勸王伐楚者、欲以自報其讐

耳。(同、伍子胥列傳)

所

所殺者赤帝之子、殺者白帝之子。(史記)

太公望呂尙之所封也。(十八史略)

爲所

襄公爲弟無知所弑、無知亦爲人所殺。(十八史略)

匡人嘗爲陽虎所暴。(同)

李平廖立皆爲亮所廢。(同)

遇

去之趙、見逐入韓、魏、遇奪釜鬲於塗。(史記、范雎蔡澤列傳)

受

先絕齊、後責地、且必受欺於張儀。(戰國策)

右の外「取」「遭」等によつて受身をあらはすものあれど用例少く、又復作文

上に使用する様なことは先づないと見てよいものであらう。

(2) 前置詞によるもの

「於」

西喪地於秦七百里、南辱於楚、寡人恥之。(孟子、梁惠王)

治於人者、食人、治人者、食於人、天下之通義也。(孟子、滕文公)

子亦知子之賤於王乎。(史記、張儀列傳)

「于」

且陽子之不賢、則將役于賢、以奉其上矣。(韓愈、爭臣論)

憂心悄悄、慍于群小。(孟子、盡心)

「乎」

志乎古者、必遺乎今。(韓愈、答李翊書)

在下位、不獲乎上、民不可得而治矣。(中庸)

獲乎上、有道、不信乎朋友、不獲乎上。(中庸)

(3) 文意によるもの

軍敗身辱、棲于會稽、國爲虛莽。(史記、仲尼弟子列傳)

子曰、忠告而善導之、不可則止、無自辱焉。(論語、顏淵)

事君數斯辱矣、朋友數斯疏矣。(論語、里仁)

天下有道、則小德役大德、小賢役大賢。(孟子、離婁)

上怒曰、烹之。通曰、嗟乎冤哉烹也。(史記、淮陰侯列傳)

管仲死、豎刁、易牙、開方用威、公薨於亂、五公子爭立。(蘇洵、管仲論)

狡兔死、走狗烹、飛鳥盡、良弓藏。(十八史略)

太子犯法、鞅曰、法之不行、自上犯之。君嗣不可施刑、刑其傳公子虔(同)

この語法は多く用ゐられてゐる。前後の關係より推斷して受身格として讀むべきものである。

(b) 使役格語法

使役格を作るには左の二法による。

- (1) 使、俾、令、教、遣等の助動詞を用ゐる。
- (2) 語勢、文意によるもの
- (1) 助動詞によるもの

「使」

今吾日食之以大牢而欲使之復茹其菽哉 (蘇洵書論)
 使民好文而益媮飾詐而相高則有之矣 (蘇軾敦教化)
 使吾揮手頓足改容失色 (歐陽修憎蒼蠅賦)
 子曰民可使由之不可使知之 (論語泰伯)
 子曰如有周公之才之美使驕且吝其餘不足觀也已矣 (同)

「俾」(使と同じ)

以長以教俾至於成人 (歐陽修瀧岡阡表)
 人之彥聖而違之俾不通 (大學)
 明神殛之俾失其民隊命亡氏踏其國家 (左傳襄公十一年)

「令」

驩曰令薛民親君 (十八史略)
 吾令人望其氣皆爲龍成五采此天子氣也 (同)
 令齊師善射者萬弩夾道而伏 (同)
 令作詩不能稱前時之聞 (王安石傷仲永)
 王卽不聽用鞅必殺之無令出境 (史記商君列傳)

「教」

天祥曰吾不能扞父母乃教人叛父母可乎 (十八史略)

誰爲含愁獨不見、更教明月照流黃、(唐詩選、沈佺期)
晉侯以樂之半賜魏絳、曰、子教寡人和諸戎狄、以正諸華、(左傳、襄公十一年)

遣

秦遣孟明襲鄭、因破滑、(十八史略)

遣從者懷璧間行先歸、(同)

始皇乃遣蒙恬發兵三十萬人北伐匈奴、(同)

義帝天下之賢主也、獨遣沛公入關、不遣項羽、(蘇東坡、范增論)

乃遣張良往立信爲齊王、(史記、淮陰侯列傳)

使(俾)は使役してさせる。令は命令してさせる。教は教へてさせる。遣は派遣してさせる。と云はれてゐるがさうとも限らぬ。然しこの意を心得て居れば復作文上大いに助かるから附記して置く。

(2) 語勢文意によるもの

國子先生晨入大學、招諸生立館下、(韓愈、進學解)

介子推割股以食之、(十八史略)

乃命南正重司天、以屬神、火正黎司地、以屬民、使無相侵瀆、(同)

右手招十九人、歃血於堂下、曰、公等碌々、(同)

管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下、(論語、憲問)

止子路宿、殺雞爲黍而食之、見其二子、(同、微子)

坐之堂下、賜僕妾之食、(史記、張儀列傳)

增勸羽殺沛公、(蘇東坡、范增論)

庖有肥肉、廄有肥馬、民有飢色、野有餓莩、此率獸而食人也、(孟子、梁惠王)

下馬飲君酒、問君何所之、(唐詩選、王維)



屬予作文以記之。（范仲淹、岳陽樓記）

此の類は漢文には多數用ゐられてある。讀解の際十分に注意して文意を誤らぬようにせねばならぬ。應試の作文などには此法は用ゐぬ方が無難であると思ふ。

(c) 表時格語法

過去、現在、未來の時を表すには、副詞又は助動詞を、動詞又は形容詞の上に置いて、各、其の意を表示する。

- (1) 過去——既。已。業。スデニ以。スデニ故。嘗。カツテ常。會。サキニ且。サキニ嚮。サキニ向。サキニ鄉。サキニ往年。
- 往者。昔。往昔。向者。

- (2) 未來——將。且。

- (3) 現在——今。方。方今。如今。當今。現今。今也。

- (1) 過去を表はすもの

「既」

既、芟山而更居。（柳宋元、鉛母潭記）

襄王既立。（十八史略）

文王既歿、文不在茲乎。（論語、子罕）

冉曰、既庶矣、又何加焉、曰、富之、曰、既富矣、又何加焉。（同、子路）

舊穀既沒、新穀既升。（同、陽貨）

「已」

則買燈之事、尋已停罷。（蘇軾、上神宗皇帝書）

宰我問、三年之喪、期已久矣。（論語、陽貨）

今乘輿已駕矣、有司未知所之。（孟子、梁惠王）

親既以天年下世、妾已嫁夫。（史記、刺客傳）

「既已」

聖人既已絶之則屏之遠方終身不齒。(蘇軾無沮善)

太子聞之馳往伏屍而哭極哀既已不可奈何。(史記刺客傳)

業^{スレニ}

良業爲取履因長跪進之。(史記留侯世家)

項王范增疑沛公之有天下業已講和(同項羽本紀)

以^{ステニ}

湯以代桀而恐天下言己爲貪也。(韓非子說林上)

社稷無常奉君臣無常位自古以然(左傳昭公三十一年)

故^{モト}

蔓成然故事蔡公。(左傳卷公十三年)

嘗^ニ

禹嘗薦益於天。(十八史略)

匡人嘗爲陽虎所暴。(同)

管仲嘗遮莒道射小白中帶鉤。(同)

俎豆之事則嘗聞之矣。(論語衛靈公)

非公事未嘗至於偃之室。(同雍也)

常^{カッテ}

常曰民所以安其田里而無歎息愁恨之聲者政平訟理也。(十八史略)

曾^ニ

臣侍湯藥未嘗廢離。(李密陳情表)

孝惠帝曾春出游。(史記叔孫通)

○曾を「スナハチ」と讀むべきものを多くの人が「カッテ」とよみあやまつてゐる場合が多い。左の如き「曾」は「スナハチ」と讀むべきである。

有酒食先生饌曾是以爲孝乎。(論語爲政)

子曰、嗚呼、曾謂泰山不如林放乎。(論語、八佾)

子曰、吾以子爲オモヒシガ異之間フナラント。曾由與求之間。(論語、先進)

爾何曾比予於管仲。(孟子)

且サキニ

上丈夫之事、吾願與伯父圖之、且寡人之出、伯父無裏言。(左傳、莊公)

嚮郷 嚮郷

郷爲身死而不受、今爲妻妾之奉爲之。(孟子、告子)

斯吾所謂道也、非向所謂老與佛之道也。(韓愈、原道)

向使備一夫於家、受若直ナシ、怠若事、又盜若貨器、則……(柳宋元、送薛存義

之任序)

然後知吾嚮之未始游、游於是乎始。(同、始得西山宴遊記)

向者

向者ニズナハチ曾經臣寮繳進、陛下置不問。(蘇轍、爲兄軾下獄上書)

向者覇上棘門軍、兒戲耳。(十八史略)

往年

往年吳公吮其父。(十八史略)

往者

往者河西用兵而家人子弟皆籍以爲軍。(蘇軾、敦教化)

昔者

夫顓臾、昔者先王以爲東蒙主、且在邦域之中矣。(論語、季氏)

昔者禹抑洪水而天下平。(孟子、滕文公)

(2) 現在を表はすもの

今

今天下地醜德齊、莫能相尙、無他。(孟子、公孫丑)

今之揚與墨辯者如追放豚。(孟子、盡心)

今南方已定、兵甲已足。(十八史略)

今兩虎共鬪、其勢不俱生。(同)

今夫顓臾固而近於費、今不取後生必爲子孫憂。(論語、季氏)

「方」

天下之士方且撥拾三代之遺文、補葺漢唐之故事。(蘇軾、策略)

國子司業楊君巨源、方以能詩、訓後進。(韓愈、送楊少尹序)

項羽方擊齊。(十八史略)

然創業之難往矣、守成難、方與諸公慎之。(同)

「方今」

方今聖賢相逢、治具畢張。(韓愈、進學解)

方今人文日就月進。(戊申詔書)

「今也」

今也欲治其心而外天下國家。(韓愈、原道)

今也舉夷狄之法而加之先王之教之上。(同)

「今者」

今者有小人之言、令將軍與臣有隙。(十八史略)

(3) 未來を表はすもの

「將」

冉有曰、夫子爲衛君乎、子貢曰、諾吾將問之。(論語、述而)

天將以夫子爲木鐸。(同、八佾)

將入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也。(同、雍也)

西伯將獵、卜之。(十八史略)

王曰、三年不蜚、蜚將衝天、三年不鳴、鳴將驚人。(同)

「且」

或讒種且作亂、賜劍死。(十八史略)

速斬魏齊頭來、不然且屠大梁。(同)

先驅曰、天子且至軍門。(同)

吳王見且斬愛姬、大駭。(史記、孫武列傳)

外無侍而猶死守、人相食且盡。(韓愈、張中丞傳後序)

(d) 當然、義務、豫定格語法

當然、義務、豫定を表すには、可、當、宜、應等の助動詞を用ゐる。これ等の語は副詞をも兼ねた語である。

「可」

子曰、可與言而與之不言、失人、不可與言而與之言、失言。(論語)

可以速而速、可以久而久、可以處而處、可以仕而仕、孔子也。(孟子、萬章下)

孟子曰、可以取、可以無取、取傷廉、可以與、可以無與、與傷惠、可以死、可以無死、死傷勇。(同離婁下)

「當」

嗟呼大丈夫當如此矣。(十八史略)

天下已定、臣固當烹。(同)

趙當亡而不亡。(麓愈、初見秦)

王之弟當封邪、周公宜以時言於王、不待其戲而賀以成之也。(柳宗元、桐葉封弟辨)

桐葉封弟辨)

孟子曰、言人之不善、當如後患何。(孟子、離婁下)

「宜」

惟仁者宜在高位。(孟子、離婁上)

若書中言退之不宜一日在館下。(柳宗元、與韓愈論史書)

宜莫如舜、舜之不告而娶何也。(孟子、萬章)

宜付有司論刑賞、以昭陛下平明之治。(諸葛亮、出師表)

王之弟當封邪、周公宜以時言於王、不待其戲而賀以成之也。(柳宗元、桐葉封弟辨)

桐葉封弟辨)

○宜は可よりは強くて、「不可不」よりは弱いのである。

「應」

聖主不須封禪、凡主不應封禪。(梁武帝紀)

伍舉問應爲後之辭。(左傳、昭公元年)

簾前春風應須惜、世上浮名好是閑。(唐詩選)

(e) 比較格語法

事物の大小、長短、優劣、得失等を比較するには、於、于、乎等の前置詞を用ゐる。

(1) 前置詞によるもの

「於」

況賢於隗者、豈遠千里哉。(十八史略)

叔孫武叔語大夫於朝、曰、子貢賢於仲尼。(論語、子張)

子曰、民之於仁也、甚於水火。(同、衛靈公)

子之不孝、莫大於此矣。(韓非子、姦劫弑臣)

負棟之柱多於南畝之農夫、架梁之椽多於機上之工女、釘頭磷々多於

在庾之粟粒、瓦縫參差多於周身之帛縷。(杜牧、阿房宮賦)

「于」

罪莫大于可欲、禍莫大于不知足。(老子)

青出于藍、而青于藍、冰水爲之、而寒于水。(荀子、勸學篇)

乎

孝子之至、莫大乎尊親。(孟子、萬章)

莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。(中庸)

道莫大乎仁義、教莫正乎禮樂刑政。(韓愈、送文暢序)

城之大者莫大于天下矣。(莊子、盜跖)

(2) 前置詞によらざるもの

梁惠王曰、晉國天下莫強焉。(孟子、梁惠王上)

孟子曰、萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉、強恕而行、求仁莫近焉。

(孟子、盡心上)

(f) 選擇格語法

比較の格と似てゐるものであるが、これは二者を比較して「そのいづれ」といふ意を表はすもので左の語を用ゐてその格を作る。

與……孰

與……寧。無寧

與……孰若

與……豈若

孰與

與、寧、

(1) 「與……孰」

任人有問屋廬子曰、禮與食孰重、曰、禮重、色與禮孰重、曰、禮重。(孟子、告

子下)

曰、吾子與子路孰賢。(孟子、公孫丑上)

(2) 「與……寧」

林放問禮之本、子曰、大哉問、禮與其奢也寧儉、喪與其易也寧戚。(論語、八佾)

與其有聚斂之臣、寧有盜臣。(大學)

子曰、奢則不遜、與其不遜也寧固。(論語、述而)

王孫賈問曰、與其媚於奧、寧媚於竈、何謂。(論語、八佾)

(3) 「與……孰若」

與其有譽於前、孰若無毀於其後、與其有樂於身、孰若無憂於其心。(韓愈、送李愿歸盤谷序)

(4) 「與……豈若」

且而與其從辟人之士、豈若從辟世之士哉。(論語、微子)

與我處吠畝之中、由是以樂堯舜之道、吾豈若使是君爲堯舜之君哉

(5) 「孰與」

蘭相如固止之曰、公之視廉將軍孰與秦王、曰不若也。(史記、廉頗列傳)

起曰、治百官親萬民實府庫、子孰與起、文曰、不如子。(同、孫子吳起列傳)

(6) 「與」「寧」

蘇秦以鄙諺說諸侯曰、寧爲雞口無爲牛後。(十八史略)

與其譽堯而非桀也、不如兩忘而化其道。(莊子)

(7) 「與……無寧」

子與其死於臣之手也、無寧死於二三子之手乎。(論語、子罕)

(g) 反語格語法

述べんとするところについて、その文意、語勢を強調せんがために反語法を用ゐる。
豈……乎（哉）、何有、焉……乎等の如く上に疑問副詞を置き、下に感動の終詞（助辭）を置くことが多い。然し疑問副詞のみにも反語になることもあるし、終詞のみのももある。

(1) 疑問副詞を用ゐたもの

「豈……也、哉、乎、歟」

今縦未能即行、豈可恣之轉令盛也。韓愈論佛骨表

豈杜其告萬世也。曾鞏書魏鄭公傳

此四臣者、將照千里、豈特十二乘哉。十八史略

則天下之理、豈有以加於此哉。中庸序

使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六國相印乎。十八史略

大丈夫不能自食、吾哀王孫而進食、豈望報乎。十八史略

豈愛其君之謂歟。曾鞏書魏鄭公傳

「豈」

顧此買燈毫髮之失、豈能上累日月之明。蘇軾上神宗皇帝書

子曰、若聖與仁、則吾豈敢。論語述而

夫豈不義而曾子言之。孟子公孫丑下

「何……哉、也」

子曰、居上不寬、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉。論語八佾

大車無輓、小車無軌、其何以行之哉。論語爲政

子路不說曰、未之也已、何必公山氏之之也。論語陽貨

相告曰、吾王庶幾無疾病、與、何以能鼓樂也。孟子梁惠王下

「何」

對曰、賜也、何敢望回。論語公冶長

世之賢者何嘗之有、或出於賈豎賊人。(蘇軾、無沮善)

四方之人、何ヨリテカ自知之。(同、司馬溫公神道碑)

鄉人曰、肉食者謀之、又何間焉。(左傳、莊公十年)

「奚(何と全く同じ)……哉、乎」

此惟救死而恐不贖タラ。奚暇治禮義哉。(孟子、梁惠王上)

彼唯人言之惡聞、奚以夫譏々爲乎。(莊子)

「奚」

子曰、相維辟公、天子穆々、奚取三家之堂。(論語、八佾)

或謂孔子曰、子奚不爲政。(同、爲政)

佞人之心翦々者、又奚足以語至道。(莊子)

「胡」

物トシテ物トセラレ而不物。於物則胡可得而累邪。(莊子)

田園將蕪、胡不歸。(陶淵明、歸去來辭)

楚王怒叱曰、胡不下。(十八史略)

君子胡不慥々爾。(中庸)

「曷」

有罪無罪、惟我在、天下曷敢有越厥志。(孟子、梁惠王下)

口耳之間四寸耳、曷足以美七尺之軀哉。(荀子)

予曷敢不于前寧人攸受休畢。(周書)

「安……哉、乎」

燕雀安知鴻鵠之志哉。(十八史略)

安能事爲之褒貶、使天下之人動有所法、如春秋哉。(蘇洵、史論)

安能以身之察々、受物之汶々者乎。(屈平、漁夫辭)

吾安能棄南面王樂、而復爲人間之勞乎。(莊子)

「安」

噲曰、臣死且不辟、扈酒安足辭。(十八史略)

故法術之士、安能蒙死亡而進其說、姦邪之臣、安肯棄利而退其身。(韓

非子、孤憤)

「烏……邪也哉」

使者曰、烏謂此邪、必若所云、則是蜀不變服而巴不化俗也。(史記、司馬

相如列傳)

「烏有此事也」(同)

「烏」

烏有城壞其徒俱死、獨蒙媿恥求活。(韓愈、張中丞傳後序)

「惡……哉也乎」

撫劍疾視曰、彼惡敢當我哉。(孟子、梁惠王下)

為民父母、行政不免於率獸而食人、惡在其為民父母也。(同)

彼又惡無驚乎哉。(莊子)

「惡乎知君子小人哉」(同)

「惡」

王無異於百姓之以王為愛也、以小易大、彼惡知之。(孟子、梁惠王上)

若我而不有之、彼惡得而知之。(莊子)

「焉……乎」

子曰、焉用佞、禦人以口給、屢憎於人、不知其仁、焉用佞。(論語、公冶長)

曰、管氏有三歸、官事不攝、焉得儉。(同、八佾)

夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀。(同、陽貨)

吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食。(同)

孟子曰、是焉得為大丈夫乎。(孟子、滕文公下)

臧氏之子焉能使予不遇。(同、梁惠王下)

寧……乎、耶

王侯將相寧有種乎。(十八史略)

秦伯曰、晉國和乎。對曰、不和、小人耻失其君而悼喪其親、不憚征繕以

立圍也、曰必報讎、寧事戎狄。(左傳、僖公十五年)

寧能處小朝廷求活耶。(胡詮、上高宗封事)

今予之生地皆走、寧尙可得而用之乎。(史記、淮陰侯列傳)

詎

「距」「鉅」「渠」「遽」等とも書く、同音にして同じ。單獨にも同むられるが

「庸」「豈」「何」「寧」等と合して用むられること多し。

(單獨)

詎敢肆其胸臆、輕犯人心。(蘇軾、上神宗高帝書)

樓前相望不相知、陌上相逢詎相識。(唐詩選)

天下詎可知而閉長者乎。(後漢書)

(合字)

而焚之而惑後世、庸詎之非謀己之姦計乎。(曾鞏、書魏鄭公傳)

聊試仰首一鳴號焉、庸詎知有力者不哀其窮而忘一舉手一投足勞而

轉之清波乎。(韓愈、應科目時與人書)

蘇君之時儀何敢言、且蘇君在、儀寧渠能乎。(史記、張儀列傳)

庸……乎

吾師道也、夫庸知其年之先後生乎吾乎。(韓愈、師說)

且吾聞唐叔之封也、箕子曰、其後必大、晉其庸可冀乎。(左傳、僖公十五

年)

曰、勝以直聞、不告女、庸爲直乎、將以殺爾父。(左傳、哀公十六年)

從者皆國器也、此天所置、庸可殺乎。(史記、晉世家)

「那」

人情已厭南中苦、鴻雁那從北地來。(唐詩選、王勃)

自是君身有仙骨、世人那得知其故。(唐詩選、李白)

「巨」

沛公不先破關中兵、公巨能入乎。(十八史略)

(2) 疑問代名詞を用いたもの

「孰」

管氏而知禮、孰不知禮。(論語、八佾)

赤也爲之小、孰能爲之大。(同、先進)

人亦孰不欲富貴。(孟子、公孫丑下)

「誰」

子曰、誰能出不由戶、何莫由斯道也。(論語、雍也)

能治其國家、誰敢侮之。(孟子、公孫丑)

(3) 「敢不」

此疇曩心跡、安敢不盡於君侯哉。(李白、與韓荊州書)

愈敢不吐露情實。(韓愈、答陳商書)

(4) 終詞によるもの

父死不葬、爰及于戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎。(十八史略)

相如雖鴛鴦、獨畏廉將軍哉。(同)

可以人而不如鳥乎。(大學)

自反不縮、雖褐寬博、吾不憚焉。(孟子、公孫丑上)

聖人之愛民如此、而暇耕乎。(同、滕文公)

仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎。(論語、秦伯)

子曰、學而時習之、不亦悅乎、有朋自遠方來、不亦樂乎、人不知而不愠、不亦君子乎。(論語、學而)

孔子曰、才難、不其然乎、唐虞之際、於斯爲盛。(同、秦伯)

(h) 可能格語法

動作、叙述の可能をあらはす語法にして、可、足、得、可得而

「可」

上可坐萬人、下可建五丈旗。(十八史略)

道隘而旁多阻、可伏兵。(同)

仲尼不可毀也、他人之賢者丘陵也、猶可踰也、仲尼日月也、無得而踰也。

(論語、子張)

曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人

與君子人也。(同、秦伯)

子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也。(同、子罕)

民可使由之、不可使知之。(同、秦伯)

子曰、可與共學、未可與共適道。(同、子罕)

「足」

江東雖小、亦足以王、願急度。(十八史略)

智足以拒諫、言足以飾非。(同)

退而省其私、亦足以發、回也不愚。(論語、爲政)

強足以拒敵、辯足以飾非。(莊子、盜石)

力足以舉百鈞、明足以察秋毫之末。(孟子、梁惠王上)

今恩足以及禽獸、而功不至於百姓者、獨何與。(同)

唯天下至聖、爲能聰明睿知、足以有臨也、寬裕溫柔、足以有容也。(中庸)

「得」

齊宣王問曰、齊桓晉文之事、可得聞乎。(孟子、梁惠王上)

曰、王之所大欲、可得聞與。(同)

相如曰、五步之內、臣得以頸血濺大王、左右欲刃之、相如叱之。(十八史略)

「可得而」

夫子之文章、可得而聞也。(論語、公冶長)

仲尼日月也、無得而踰也。(同、子張)

(得而は得一字のものよりもその意強くなる。意義は同じい。)

(i) 比喻格語法

比喻の語法には明喩と暗喩とがある。「何々は何々のごとし」と二者を喩へるのであ

る。「如」「若」由「猶」等を用ゐ、後二語は「ナホ……ゴトシ」と二度に讀むものである。

「如」

其仁如天、其知如神、就之如火、望之如雲。(十八史略)

李陵謂武曰、人生如朝露、何自苦如此。(同)

客有吹洞簫者、倚歌而和之、其聲嗚々然、如怨、如慕、如泣、如訴、餘音嫋々

不絕、如縷、舞幽壑之潛蛟、泣孤舟之嫠婦。(蘇軾、前赤壁賦)

「若」

老子告之曰、良賈深藏、若虛、君子盛德容貌、若愚。(十八史略)

相如曰、王以名使括、若膠柱鼓瑟耳。(同)

其冠不正、望々然去之、若將浼焉。(孟子、公孫丑)

宜與夫禮、若不相似然。(同)

公孫丑曰、道則高矣美矣、宜若登天然。(同、盡心)

其後天下大治、幾若華胥。(十八史略)

若^{ナホ}火之始然、泉之始達。(孟子、公孫丑上)

由^{ナホ}

民歸之、由水之就下沛然、誰能禦之。(孟子、梁惠王上)

今之樂由古之樂也。(同、下)

其橫逆由是也、君子必自反他。(同、離婁下)

由射於百步之外也、其至爾力也。(同、萬章下)

猶^{ナホ}……トシ

子思曰、聖人用人猶匠之用木、取其所長、棄其所短。(十八史略)

今見老子其猶龍乎。(同)

子曰、聽訟吾猶人也、必也使無訟乎。(論語、顏淵、大學)

夫子之不可及也、猶天之不可階而升也。(同、子張)

子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與。(同、陽貨)

以若所爲、求若所欲、猶緣木而求魚也。(孟子、梁惠王上)

詩曰、天之方蹶、無然泄泄。泄泄猶沓沓也。(同、離婁上)

今惡死亡而樂不仁、是猶惡醉而強酒。(同)

(j) 假定格語法

假定の意をあらはすには、「若^{モシ}」「如^{モシ}」「設^{モシ}」「倘^{モシ}」「郎^{モシ}」「假如^{ダトヒ}」「假令^{ダトヒ}」「縱^{ダトヒ}」「就^{ダトヒ}」「苟^{イヤシクモ}」等を用ゐ、又「使^シ」「令^シ」等をも用ゐる。外に語勢、文意より假定格をあらはすこともある。

「如^シ」

如有用我者、吾其爲東周乎。(論語、陽貨)

子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之、如不可求、從吾所好。(同、述而)

如水益深、如火益熱、亦運而已矣。(孟子、梁惠王)

彼如曰孰可以伐之、則將應之曰、爲天吏則可以伐之。(同、公孫丑下)
孟子曰、仁則榮、不仁則辱、今惡辱而居不仁、是猶惡濕而居下也。如惡
之莫如貴德而尊士。(同上)

如不得其道也、雖疾不止、終莫幸而至焉。(韓愈、送王墳序)

〔若〕

若有欲學法令、以吏爲師。(十八史略)

若都不可復、猶將畊於寬閑之野、釣於寂寞之濱。(韓愈、答崔立之書)

若見僕困窮、便相於邑、則與不學道者、不大相遠矣。(蘇軾、與李公擇)

他植者則不然、根拳而土易、其培之也、若不過焉、則不及焉。(柳完元、種

樹郭橐駝傳)

〔設〕

設有不幸、王以桐葉戲婦寺、亦將舉而縱乎。(柳完元、桐葉封弟辯)

〔倘〕

設使與夫之今之善進取者、競於蒙昧之中。(韓愈、答崔立之書)

或曰、彼主爲室者、倘或發其私智、牽制梓人之慮。(柳完元、梓人傳)

倘急難有用、敢效微軀。(李白、與韓荊州書)

〔郎〕

郎有緩急、周亞夫真可任將。(十八史略)

〔假如〕

假如釋氏能與人爲禍祟、非守道君子之所懼也。(韓愈、與孟尚書)

假如其身至今倘存、奉其國命、來朝京師。(同、論佛骨表)

〔假令〕

假令愚民取長陵一抔土、何以加其法乎。(十八史略)

〔縱〕

縱江東父兄憐而王我、我何面目復見、獨不愧於心乎、乃刎而死。

(十八史略)

「就」

就其善鳴者、其聲清以浮、其節數以急。(韓愈、送孟東野序)

「辟」^{マトヘバ}「譬」

君子之道、辟如行遠、必自邇、辟如登高、必自卑。(中庸)

子曰、爲政以德、譬如北辰、居其所而衆星共之。(論語、爲政)

「語勢によるもの」

子曰、道不同、不相爲謀。(論語、衛靈公)

「苟」

子曰、苟有用我者、期月而已可也、三年有成。(論語、子路)

(k) 打消格語法

打消の格を作るには、打消(否定)の助動詞を打消す語の上に置き、そのあらはす所の性狀又は動作を打消し否定する語法である。打消格を作る語には次の如きものがある。

不。未。弗。盍。非。匪。無。靡。莫。^{ナシ}末。^{ナシ}勿。^{ナシ}毋。^{ナシ}罔。^{ナシ}微。^{ナシ}亡。^{ナシ}蔑。^{ナシ}

「不」

君子不重、則不威、學則不固。(論語、學而)

句讀之不知、惑之不解、或師焉、或不焉。(韓愈、師說)

崧乎泰山、不足爲高、巍乎天地、不足爲容也。(同、伯夷傳)

子曰、不在其位、不謀其政。(論語、憲問)

仁者不憂、智者不惑、勇者不懼。(同)

「未」

子曰、我未見好仁者惡不仁者。(論語、里仁)

有能一日用其力於仁矣乎、我未見力不足者、蓋有之矣、我未之見也。

(同)

言未既有笑於列者。(韓愈、進學解)

經今百年、未嘗闕事。(蘇軾、上神宗皇帝書)

未下車辟荀慈明、既下車又辟孔文學。(李白、與韓荊州書)

「弗」

季氏旅於泰山、子謂冉有曰、女弗能救與。(論語、八佾)

子曰、弗如也、吾與女弗如也。(同、公冶長)

君子遵道而行、半塗而廢、吾弗能已矣。(中庸)

有弗學、學之弗能、弗措也、有弗問、問之弗知、弗措也。(同)

「盍」(何不の合字にて意同し)

顏淵季路侍、子曰、盍各言爾志。(論語、公冶長)

哀公問於有若曰、年飢用不足、如之何、有若對曰、盍徹乎。(同、顏淵)

以一服八、何以異於鄒敵楚哉、盍亦反其本矣。(孟子、梁惠王)

王欲行之、則盍反其本也。(同)

「非」

西伯將獵、卜之曰、非龍非豸、非熊非羆、非虎非貔、所獲霸王之輔。(十八

史略)

子謂公冶長、可妻也、雖在縲紲之中、非其罪也、以其子妻之。(論語、公冶

長)

子貢曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人、子曰、賜也、非爾所及也。

(同)

子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。(論語、顏淵)

「匪」

聞童謠曰、立我烝民、莫匪爾極、不識不知、順帝之則。(十八史略)

詩云、夙夜匪懈、以事一人。(孝經)

「無」

少焉皆刺其額、無一人得免。(蘇軾、敦教化)

達巷黨人曰、大哉孔子、博學無所成名。(論語、子罕)

己所不欲、勿施於人、在邦無怨、在家無怨。(同、顏淵)

○無の用例は多くあるが、普通のもの故一々挙ぐるにもあたるまい。

「靡」

詩曰、奏假無言、時靡有爭。(中庸)

雲漢之詩曰、周餘黎民、靡有孑遺。(孟子、萬章)

織之爲珠璣華實、變之爲雷霆風雨、奇辭奧旨、靡不通達。(韓愈、上兵部李侍郎書)

「莫」

君仁、莫不仁、君義、莫不義。(孟子、離婁)

故君子語大、天下莫能載焉、語小、天下莫能破焉。(中庸)

而莫之知辟也。(同)

溥博如天、淵泉如淵、見而民莫不敬、言而民莫不信、行而民莫不說。(同)

爲君計者、莫若安民無事。(史記、蘇秦列傳)

「末」

深則厲、淺則揭、子曰、果哉、末之難矣。(論語、憲問)

既竭吾才、如有所立、卓爾、雖欲從之、末由也已。(同、子罕)

公山弗擾、以費畔、召子欲往、子路不說曰、末之也已。(同、陽貨)

不^レ曰^レ如^レ之何、如^レ之何者、吾未^レ如^レ之何也已矣。(論語、衛靈公)

人皆有是心、賢者勿^レ喪耳。(孟子、告子)

子曰、愛^レ之能勿^レ勞乎、忠焉能勿^レ誨乎。(論語、憲問)

毋^{ナシ}

子絕^レ四、毋^レ意、毋^レ必、毋^レ固、毋^レ我。(論語、子罕)

所謂誠其意者、毋^レ自欺也。(大學)

罔^{ナシ}

遭世罔^レ極、今迺隕厥身。(賈誼、弔屈原賦)

又曰、德惟一、動罔^レ不吉、德二三、動罔^レ不凶。(蘇軾、司馬溫公神堂碑)

微^{ナシ}

民到^レ于今、受^レ其賜、微^レ管仲、吾其被髮左衽矣。(論語、憲問)

雖然微^ニ子亂臣賊子接迹於後世矣。(韓愈、伯夷頌)

士固信於知己、微^ニ足下、無^レ以發^レ吾之狂言。(韓愈、答李翊書)

亡^{ナシ}

孔子對曰、有顏回者、好學不遷、怒不貳、過不幸短命死矣、今也則亡。(論

語、雍也)

蔑^{ナシ}

晉政多門、不可從也、寧事齊楚、有亡而已。蔑^レ從晉矣。(左傳、成公十六

年)

(1) 禁止格語法

打消格を作る助動詞によつて動作の禁止をあらはす。禁止すべき語の上に置く。その語は主として左の如し。

無。莫。勿。毋。

右の内、勿が一番禁止の意強し。

無^{ナカレ}

子曰、君子不重則不威、學則不固、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改。

(論語、學而)

說諸侯曰、寧爲雞口、無爲牛後。(十八史略)

固曰、公孫子務正學以言、無曲學以阿世。(同)

諸生、業患不能精、無患有司之不明、行患不能成、無患有司之不公。(韓愈、進學解)

愈、進學解)

對曰、王請無好小勇。(孟子、梁惠王)

初命曰、誅不孝、無易樹子、無以妾爲妻。(同、告子下)

莫^{ナカレ}

歸心莫問三江水、旅服從、沾九日霜。(唐詩選、張南史)

莫謾愁沾酒、囊中自有錢。(同、賀知章)

更催飛將追驕虜、莫遣沙場匹馬還。(同、嚴武)

勿

過則勿憚改。(論語、子罕)

子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。(同、顏淵)

忠恕違道不遠、施諸己而不願、勿施於人。(中庸)

孟子曰、說大人則藐之、勿視其巍々然。(孟子、盡心)

左右皆曰可殺、勿聽、諸大夫皆曰可殺、勿聽。(同、梁惠王下)

毋^{ナカレ}

子謂子夏曰、爲君子儒、毋爲小人儒。(論語、雍也)

子夏爲莒父宰、問政、子曰、毋欲速、毋見小利。(同、子路)

載書曰、凡我同盟、毋蘊年、毋壅利、毋保姦、毋留隱。(左傳、襄公十一年)

(m) 二重打消格語法

打消の助動詞を重用せるものにして、その意は打消を打消すから肯定となる。一口に二重打消と言つても、その語法形式には色々ある。左に主要なものを述べよう。

(1) 不を二つ重ねたもの

子貢曰、君子一言以爲智、一言以爲不智、言不可不慎也。(論語、子張)

子曰、出則事公卿、入則事父兄、喪事不敢不勉。(同、子罕)

孔子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也。(同、憲問)

曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠。(同、泰伯)

有國者、不可以不慎。(大學)

庸德之行、庸言之謹、有所不足、不敢不勉。(中庸)

萬取千焉、千取百焉、不爲不多矣。(孟子、梁惠王上)

王問臣、臣不敢不以正對。(同、萬章下)

右の諸例はいづれも二重打消でその意は肯定となるものであるが、これと形式は似てゐて、その意味、讀法の全々異なるものがあるから注意すべきである。即ち例を以て示せば、

子曰、不憤不啓、不悱不發、舉一隅不以三隅反、則不復也。(論語、述而)

苟爲後義而先利、不奪不饜。(孟子、梁惠王)

の傍線を施せる部分のもの如きである。よく文意を考へて判断すべきで、如此き例は漢文中には無数にある。研究中によく心して意に留めて見られ度し。

(2) 未と不とを重ねたもの

曰、君子之至於斯者、吾未嘗不得見也。(論語、八佾)

未、有上好仁而下不好義者也。(大學)

未、有、好、義、其、事、不、終、也。(大學)

子、瞻、未、始、不、蹇、裳、先、之。(蘇轍、武昌九曲亭記)

(3) 非、と、不、と、重、ね、た、も、の

冉、有、曰、非、不、說、子、之、道、也、力、不、足、也。(論語、雍也)

周、公、之、封、於、魯、爲、方、百、里、也、地、非、不、足、而、儉、於、百、里、也、太、公、之、封、於、齊、也、

亦、爲、方、百、里、也、地、非、不、足、也。(孟子、告子下)

故、王、之、不、王、不、爲、也、非、不、能、也。(同、梁、惠、王、上)

城、非、不、高、也、池、非、不、深、也、兵、革、非、不、堅、利、也、米、粟、非、不、多、也、委、而、去、之、是

地、利、不、如、人、和、也。(同、公、孫、丑、下)

(4) 莫、と、不、と、重、ね、た、も、の

三、千、之、徒、蓋、莫、不、聞、其、說。(大學、章、句、序)

然、人、莫、不、有、是、形、故、雖、上、智、不、能、無、人、心。(中庸、章、句、序)

言、而、民、莫、不、信、行、而、民、莫、不、說。(中庸)

百、官、有、司、莫、敢、不、哀。(孟子、滕、文、公、上)

君、仁、莫、不、仁、君、義、莫、不、義、君、正、莫、不、正、一、正、君、而、國、定、矣。(同、離、婁、上)

度、其、當、時、之、人、莫、不、以、爲、大、怪、也。(蘇洵、書、論)

而、書、益、多、世、莫、不、有。(蘇軾、李、氏、山、房、藏、書、記)

莫、不、斂、衽、變、色、咨、嗟、太、息、或、至、於、流、涕、也。(同、司、馬、溫、公、神、道、碑)

上、好、禮、則、民、莫、不、敢、敬。(論語)

(5) 無、と、不、と、重、ね、た、も、の

小、人、閒、居、爲、不、善、無、所、不、至。(大學)

孩、提、之、童、無、不、知、愛、其、親、也。(孟子、盡、心、上)

故、雖、下、愚、不、能、無、道、心。(中庸、章、句、序)

是、以、當、世、之、人、無、不、學。(大學、章、句、序)

- (6) 無と非と重ねたもの
動無非法、法所以凌過滅私也。(韓非子、有度)
- (7) 莫と非と重ねたもの
孟子曰、莫非命也、順受其正。(孟子、盡心上)
詩云、普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。(同、萬章上)
曰、此莫非王事、我獨賢勞也。(同)
- (8) 尺地莫非其有也、一民莫非其臣也。(同、公孫丑)
莫と匪と重ねたもの
聞童謠曰、立我烝民、莫匪爾極、不識不知、順帝之則。(十八史略)
- (9) 未と無と重ねたもの
子曰、自行束修以上、吾未嘗無誨焉。(論語、述而)
- (01) 無を二つ重ねたもの

秦漢而還、多事四夷、中州耗斲、無世無之。(李華、弔古戰場文)

若夫保姓受氏、以守宗祊、世不絕祀、無國無之、祿之大者也、不可謂不朽。

(左傳、襄公二十四年)

○此の形と同一にして、その讀法意味の異なるものが多くあるから注意して誤らぬやうにせねばならぬ。

(ii) 疑問格語法

疑問の語法を作るには左の法による。

- (1) 疑問代名詞(不定名詞)の使用
- (2) 疑問副詞(不定副詞)の使用
- (3) 疑問動詞(不定動詞)の使用
- (4) 疑問助詞の使用

右の内主要なものは(2)の不定副詞による疑問格の形成であつて、(1)のものもその文中の作用から云へば副詞的な立場にあるのである。然して(1)(2)の文にありては、疑問を現はす語は、述語の上に置かれて、或は客語的、補語的、修飾語的(副詞的)位置に立つてゐるものである。今便宜上(1)(2)を合して、「疑問副詞によるもの」として述べる。

(1) 疑問副詞によるもの(疑問代名詞によるものも含む)

孔子與之坐而問焉、曰、夫子何爲、對曰、夫子欲寡其過而未能也。(論語、

憲問)

子路曰、衛君待子而爲政、子將奚先。(同、子路)

子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣。(同、子罕)

子曰、內省不疚、夫何憂何懼。(同、顏淵)

衛公孫朝問於子貢曰、仲尼焉學。(同、子張)

誰爲爲之、孰令聽之。(漢書)

子曰、孰謂微生高直、或乞醢焉、乞諸其隣而與之。(論語、公冶長)

子曰、小子何莫學夫詩。(同、陽貨)

苑風曰、子將奚之、曰、將之大壑。(莊子、天地)

顏回見仲尼請行、曰、奚之。曰、將之衛、曰、奚爲焉。(同、人間世)

曷不委心任去留、胡爲遑遑欲何之。(陶淵明、歸去來辭)

湯誓曰、時日害喪、予與女皆亡。(孟子、梁惠王上)

卒然問曰、天下惡乎定、吾對曰、定于一。(同)

敢問、夫子惡乎長、曰、我知言、我善養吾浩然之氣。(同、公孫丑上)

子路宿於石門、晨門曰、奚自、子路曰、自孔子。(論語、憲問)

世人皆濁、何不泥其泥而揚其波、衆人皆醉、何不醺其糟而歌其醜。(屈平、漁夫辭)

(2) 疑問動詞によるもの

鈞是人也、或爲大人、或爲小人、何也。(孟子、告子)

何哉、爾所謂達者。(論語、顔淵)

天地舉有過、卒不累覆且載者何。(王安石、原過)

公之視廉將軍、孰與秦王。(史記、廉頗列傳)

子張曰、士何如斯可謂之達矣。(論語、顔淵)

願比死者、一洒之、如之何、則可。(孟子、梁惠王上)

(3) 疑問助詞によるもの

「第三章助詞の性質とその用法」の疑問的用法の各項を参照あり度し。

第五章 復文演習問題集

假名に傍線せるものは相當漢字に改めること

論語 (七十四題)

1. 子曰く、教有りて類無し。(六字)
2. 子曰く、過ちて改めざる、是を過と謂ふ矣。(十字)
3. 子曰く、君子は其言の其行に過ぐるを耻づ。(十一字)
4. 子曰く、士にして居を懐ふは、以て士と爲すに足らず矣。(十二字)
5. 子曰く、君子は言に訥にして、行に敏ならむことを欲す。(十二字)
6. 子曰く、仁に里るを美と爲す。擇びて仁に處らずんば、焉ぞ知たるを得ん。(十三字)
7. 孟武伯孝を問ふ。子曰く、父母には唯其疾を之れ憂へしむ。(十四字)
8. 子曰く、人の己を知らざるを患へず、人を知らざるを患ふ。(十四字)
9. 曾子曰く、堂堂たるかな(乎)張や、與に並びて仁を爲し難し。(十四字)
10. 子曰く、束脩を行へるより以上は、吾未だ嘗て誨ふるなくんばあらず焉。(十四字)
11. 子、漆彫開をして仕へ使めんとす。對へて曰く、吾は斯れを之れ未だ信ずる能は

- ずと。子説ぶ。(十六字)
12. 子曰く、奢なれば則ち不遜なり、儉なれば則ち固なり、其の不遜ならむ(也)より寧ろ固なれ。(十六字)
13. 子曰く、甚しいかな吾の衰へたる(也)、久しいかな、吾復夢に周公を見ず。(十六字)
14. 子曰く、其身正しければ、令せずして行はれ、其身正しからざれば、令すと雖も従はれず。(十七字)
15. 子曰く、我生れながらにして之を知れる者にあらず、古を好み、敏以て之を求めし者なり。(十七字)
16. 子曰く、志士仁人は生を求めて以て仁を害すること無く、身を殺して以て仁を成すことあり。(十八字)
17. 子曰く、文莫は吾猶ほ人のごときなり、君子を躬行することは則ち吾未だ得るあ

らざる也。(十八字)

18. 子曰く、之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を楽しむ者に如かず。(十八字)

19. 子子賤を謂ふ。君子なる哉かくのごとき人、魯に君子無かりせば、斯れ焉にか斯を取らむ。(十八字)

20. 子曰く、士道に志して惡衣惡食を恥づる者は與に議るに足らざるなり。(十八字)

21. 子曰く、政を爲すに徳を以てするは、譬へば北辰の其所に居りて、衆星之を共ぐるが如し(之に共ふが如し)。(十八字)

22. 子曰く、之を如何せむ之を如何せんと曰はざる者は、吾之を如何ともする未きのみ(也已矣)。(十九字)

23. 子曰く、君子にして不仁なる者あるかな(矣夫)。未だ小人にして仁なる者あらざる也。(十九字)

24. 子曰く、君子、博く文を學び、之を約するに禮を以てすれば、亦以て畔かざる可し矣夫。(十九字)
25. 子曰く、孰か微生高を直なりと謂ふ。或ひと醯を乞ふ(焉)。諸を其隣に乞ひて之に與ふ。(十九字)
26. 子曰く、上に居て寛ならず、禮を爲して敬せず、喪に臨みて哀まず、吾何を以てか之を觀むや。(二十字)
27. 子曰く、位無きを患へず、立つ所以を患へよ。己を知る莫きを患へず、知らる可きを爲すを求めよ(也)。(二十字)
28. 子曰く、中人以上は以て上を語る可く(也)、中人以下は以て上を語る可からず(也)。(二十一字)
29. 子曰く、善人邦を爲むること百年ならば、亦以て殘に勝ち殺を去るべし(矣)と、誠なる哉是の言や。(二十一字)

30. 子夏曰く、日に其の亡き所を知り、月に其の能くする所を忘る、無きは、學を好むと謂ふべし(也已矣)(二十一字)。
31. 子曰く、其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉ぞ庾さんや、人焉ぞ庾さんや。(二十二字)
32. 子曰く、秦伯は其れ至徳と謂ふべし(也已矣)。三たび天下を以て譲り、民得て稱する無し(焉)(二十三字)
33. 子夏曰く、小道と雖も必ず觀るべきものあり(焉)。遠きを致すには泥まむことを恐る、是を以て君子は爲さざる也。(二十三字)
34. 林放禮の本を問ふ。子曰く、大なる哉問へること、禮は其の奢(也)ならむよりは寧ろ儉なれ、喪は其の易らむ(也)よりは寧ろ戚め。(二十五字)
35. 子曰く、不仁者は以て久しく約に處る可からず、以つて長く樂に處る可からず、仁者は仁に安んじ、知者は仁を利とす。(二十五字)

36. 子曰く、孟之反は伐らず。奔りて殿し、將に門に入らむとして、其馬に策うちて曰く、敢て後れしにあらざる也、馬進まさりし也。(二十五字)
37. 子曰く、飽食終日、心を用ゐる所無きは難いかな(矣哉)。博奕といふ者有らずや、之を爲すは猶ほ已むに賢れり。(二十五字)
38. 子曰く、徳有る者は必ず言有り、言有る者必ずしも徳有らず、仁者は必ず勇有り、勇者必ずしも仁有らず。(二十六字)
39. 子曰く、弟子入りては則ち孝、出でては則ち悌(弟) 謹みて信、汎く衆を愛して仁に親しみ、行餘力有れば、則ち以て文を學ぶ。(二十七字)
40. 有子曰く、信義に近きは言復む可き也。恭禮に近きは恥辱に遠ざかる(也)。因ること其親を失はざれば、亦宗とす可き也。(二十八字)
41. 子貢曰く、我人の諸を我に加ふるを欲せざるや、吾も亦諸を人に加ふる無からむと欲す。子曰く、賜や、爾の及ぶ所に非ず(也)。(二十八字)

42. 子曰く、民の仁に於けるや、水火よりも甚だし。水火は吾踏んで死する者を見たり。未だ仁を踏みて死する者を見ざるなり。(二十八字)
43. 子貢曰く、紂の不善も、是の如く之れ甚しきにはあらざる也。是を以て君子は下流に居るを惡む、天下の惡皆焉に歸す。(二十八字)
44. 子貢問ひて曰く、孔文子は何を以て之を文と謂ふか。子曰く、敏にして學を好み、下問を恥ぢず、是を以て之を文と謂ふ也。(二十九字)
45. 哀公問ひて曰く、何爲せば則ち民服せむ。孔子對へて曰く、直きを舉げて諸を枉れるに錯(措)けば即ち民服せむ。枉を舉げて諸を直きに錯(措)けば即ち民服せず。(三十字)
46. 子曰く、後生畏る可し、焉ぞ來者の今に如かざるを知らむや、四十五にして聞ゆる無きは(焉)、斯れ亦畏るるに足らざる也已。(三十字)
47. 子曰く、與に言ふ可くして與に言はざれば人を失ふ。與に言ふ可からずして之と

- 言へば言を失ふ。知者は人を失はず、亦言をも失はず。(三十字)
48. 子伯魚に謂つて曰く、女周南召南を爲なびたるか(矣乎)、人にして周南召南を爲なばざれば、其れ猶ほ正しく牆に面して立てるがごときか(也與)。(三十字)
49. 曾子曰く、士は以つて弘毅ならざる可からず、任重くして道遠し、仁以つて己が仕となす、亦重からずや、死して後已む、亦遠からずや。(三十二字)
50. 周公魯公に謂つて曰く、君子は其の親を施すてず、大臣をして(使)以もられざるを怨みしめず、故舊大故なければ則ち棄てざる也、備はらむことを一人に求むる毋れ。(三十五字)
51. 子游武城の宰となる、子曰く、女人なつてを得たるか(焉耳乎)、曰く、澹臺滅明といふ者あり、行くに徑に由らず、公事にあらざれば、未だ嘗て偃の室に至らざる也。(三十六字)
52. 子曰く、善人は吾得て之を見ず(矣)、恆ある者を見るを得ば斯に可なり(矣)、亡くして有りと爲し、虚しくして盈りと爲し、約にして泰と爲す、難いかな(乎)、恆有ること(矣)。(三十六字)

53. 子曰く、我を知る莫なきかな(也夫)、子貢曰く、何爲れぞ其れ子を知る莫なからむや、子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す、我を知る者は其れ天なるか。(三十六字)
54. 子夏曰、賢を賢として色に易へ、父母に事へて能く其の力を竭し、君に事へて能く其の身を致し、朋友と交り言ひて信有らば、未だ學ばずと曰ふと雖、吾は必ず之を學びたりと謂はむ(矣)。(三十八字)
55. 有子曰く、禮の用は和を貴しと爲す、先王の道も斯を美と爲す、小大之に由るも行はれざる所有り、和を知つて和するも、禮を以つて之を節せざれば亦行ふべからざる也。(三十八字)
56. 葉公孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚ぞ曰はざる、其の人と爲りや、

憤を發して食を忘れ、樂みて以て憂を忘れ、老の將に至らむとするを知らざるのみと(云爾)。(三十八字)

57. 子曰く、吾十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えず。(四十字)

58. 仲弓季氏の宰と爲りて政を問ふ。子曰く、有司を先とす。小過を赦して賢才を擧げよ。曰く、焉ぞ賢才を知つて之を擧げむ。曰く、爾の知れる所を擧げよ。爾の知らざる所は、人其れ諸を捨てむや。(四十字)

59. 柳下惠士師と爲り三たび黜けらる。人曰く、子未だ以て去る可からざるか(乎)。曰く、道を直くして人に事ふれば焉に往くとしてか三たび黜けられざらむ。道を枉げて人に事ふれば、何ぞ必しも父母の邦を去らむ。(四十字)

60. 顔淵死す、顔路子の車を請ふ。子曰く、才も不才も亦各其の子と言ふ也。鯉や死

せしとき棺有りて槨無かりき。吾徒行して以て之が槨を爲らざりしは、吾が大夫の後に従ひて、徒行す可からざるを以て也。(四十八字)

61. 齊の景公政を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たりと。公曰く、善い哉、信に如し君君ならず、臣臣ならず、父父ならず、子子ならずんば、粟有りて雖も、吾豈得て諸を食はむや、(四十七字)

62. 儀の封人見えむことを請ひて曰く、君子の斯に至れる者、吾未だ嘗て見ゆるを得ざりしことなし(也)。從者之を見えしむ。出でて曰く、二三子何ぞ喪きを患へむや、天下の道無き久し(矣)。天將に夫子を以て木鐸と爲さむとすと。(四十九字)

63. 公山弗擾費を以て畔き、子を召す。往かむと欲す。子路説ばずして曰く、之くと末きのみ(二字)、何ぞ必ずしも公山氏に之れ之かむや。子曰く、夫れ我を召す者は(而)、豈徒ならむや、如し我を用ふる者有らば、吾は其れ東周を爲さむか。(四十九字)

64. 哀公有若に問ふて曰く、年饑多て用足らず、之を如何と、有若對へて曰く、盍ぞ徹せざる(乎)、曰く、二も吾猶足らず、之を如何ぞ其れ徹せむや、對曰く、百姓足らば、君孰と與にか足らざらむ、百姓足らざれば、君孰と與にか足らむ。(五十二字)
65. 子曰く、與に共に學ぶ可きも、未だ與に道に適く可からず、與に道に適く可きも、未與に立つ可からず、與に立つ可きも、未だ與に權る可からず、唐棣の華、偏として其れ反せり(而)、豈爾を思はざらむや、室是れ遠ければなり(而)。子曰く、未だ之を思はざる也、夫れ何の遠きことか之れ有らむ(哉)。(五十四字)
66. 子曰く、小人なる哉樊須や、上禮を好めば則ち民敢へて敬せざるは莫く、上義を好めば則ち、民敢へて服せざるは莫く、上信を好めば則ち民敢へて情を用ゐざるは莫し。夫れ是の如くなれば則ち四方の民其の子を襁負して至らむ(矣)、焉ぞ稼を用ゐむ。(五十四字)

67. 楚の狂接輿歌つて孔子を過ぎて曰く、鳳よ(兮)鳳(兮)、何ぞ徳の衰へたる(也)、往者は諫む可からず、來者は猶追ふ可し、已みなむ(而)已みなむ(而)、今の政に従ふ者は殆し(而)、と、孔子下りて之と言はむと欲す、趨りて之を辟け、之と言ふを得ず。(五十六字)
68. 桀溺曰く、子は誰と爲す、曰く、仲由と爲す、曰く、是れ魯の孔丘の徒か、對へて曰く、然り、曰く、滔滔たる者は天下皆是れ也。而誰と以にか之を易めむ。且つ而其れ人を辟くるの士に従はむより、豈世を辟くるの士に従ふに若かむや、と、移して輟めず。(五十六字)
69. 叔孫武叔仲尼を毀る、子貢曰く、以て爲すこと無かれ(也)、仲尼は毀る可からざる也、他人の賢者は丘陵也、猶踰ゆ可き也、仲尼は日月なり、得て踰ゆる無し(焉)、人自ら絶んと欲すと雖も、其れ何ぞ日月を傷らむや、多に其の量を知らざるを見る也。(六十一字)

70. 子曰く、我未だ仁を好む者不仁を惡む者を見ず。仁を好む者は以て之に尙ふる無し、不仁を惡む者も其れ仁を爲すなり(矣)不仁者をして其身に加へしめず、能く一日其力を仁に用ゐる有らむか(矣乎)、我未だ力の足らざる者を見ず、蓋し之れ有らむ(矣)、我は未だ之を見ざる也。(六十三字)

71. 子曰く、富と貴とは、是れ人の欲する所也、其道を以てせざれば之を得るも處らざる也、貧と賤とは、是れ人の惡む所也、其道を以てせざれば、之を得るも去らざる也、君子仁を去りて惡にか名を成さむ、君子は終食の間も仁に違ふこと無く、造次にも必ず是に於てし、顛沛にも必ず是に於てす。(六十五字)

72. 曾子疾有り、孟敬子之を問ふ。曾子言て曰く、烏の將に死なむとするとき、其鳴くや哀し、人の將に死なむとするとき、其言や善し、君子道に貴ぶ所の者三、容貌を動かして斯に暴慢に遠ざかり(矣)、顔色を正して斯に信に近づき(矣)、辭氣を出して斯に鄙倍に遠ざかる(矣)、籩豆の事は則ち有司存せり。(六十八字)

73. 陽貨孔子を見むと欲す。孔子見えず。孔子に豚を歸る。孔子其の亡きを時ひて(也)而往きて之を拜す。諸に塗に遇ふ。孔子に謂つて曰く、來れ、予爾と言はむ、曰く、其實を懷いて其邦を迷はすは仁と謂ふ可きか、曰く、不可なり、事に從ふを好みて亟時を失ふ、知と謂ふ可きか、曰く、不可なり、日月逝きぬ、歳我と與ならず、孔子曰く、諾、吾將に仕へむとす(矣)と。(八十一字)

74. 定公問ふ。一言にして以て邦を興す可きもの諸れ有りや、孔子對へて曰く、言は以て是の若く其れ幾す可からざる也、人の言に曰く、君爲ることは難く、臣爲ることも易からずと、如し君爲ることの難きを知らば(也)、一言にして邦を興すに幾せざらむや。曰く、一言にして邦を喪ぼすこと諸れ有りや、孔子對へて曰く、言は以て是の若く其れ幾す可からざる也、人の言に曰く、予君爲ることを樂しむ無し、唯其の言にして予に違ふ莫き也と、如し其れ善にして之に違ふ莫きや、亦善からずや。如し不善にして之に違ふ莫きや、一言にして邦を喪ぼすに幾せざら

むや。(百二十字)

大學(十題)

75. 古の明德を天下に明かにせむと欲する者は、先づ其國を治む。(十四字)
76. 大學の道は、明德を明かにするに在り、民を新にするに在り、至善に止るに在り。(十六字)
77. 其本亂れて末治まる者は否矣、其の厚うする所の者薄くして、其の薄うする所の者厚きは、未だ之有らざる也。(二十四字)
78. 所謂、其の意を誠にすとは、自ら欺く毋き也、惡臭を惡むが如く、好色を好むが如し、此れを之れ自ら謙くすと謂ふ。(二十三字)
79. 小人閑居して不善を爲す。至らざる所無し。君子を見て而る後厭然として其不善を拵ふて其善を著はす。(二十六字)
80. 唯仁人之を放流し、諸を四夷に遊げ、與に中國を同じうせず。此を唯仁人能く人を愛し能く人を惡むを爲すと謂ふ。(二十七字)

を愛し能く人を惡むを爲すと謂ふ。(二十七字)

81. 未だ上仁を好みて下義を好まざる者はあらざる也、未だ義を好みて其事を終へざる者はあらざる也。未だ府庫の財の其財に非る者はあらざる也。(三十二字)
82. 大學の書は、古の大學人を教ふる所以の法也。蓋し天生民を降してより則ち既に之に與ふるに仁義禮智の性を以てせざるは莫し(矣)。(三十五字)
83. 故に君子は諸を己に有して而る後諸を人に求む。諸を己に無くして而る後諸を人に非る。身に藏する所恕ならずして能く諸を人に喻す者は、未だ之れ有らざる也。(三十五字)
84. 詩に云ふ、緝蠻たる黃鳥丘隅に止る。子曰く、止まるに於て其の止る所を知る。人を以てして鳥に如かざる可けんや、と。詩に云ふ、穆々たる文王あゝ(於)緝熙にして敬して止る、と。人君と爲つては仁に止り、人臣と爲つては敬に止る。(四十九字)

中庸(十一題)

85. 誠は自ら己を成すのみ(而已)に非る也。物を成す所以なり。(十四字)
86. 隠れたるより見はるゝは莫く、微なるより顯なるは莫し。故に君子は其の獨を慎しむ(也)。(十五字)
87. 君子未だ此の如くならずして蚤く天下に譽有る者はあらざる也。(十六字)
88. 君子の道は、辟へば遠きに行くには必ず邇きよりするが如く、辟へば高きに登るには必ず卑きよりするが如し。(十八字)
89. 子曰く、道は人に遠からず、人の道を爲して人に遠きは、以て道と爲す可からず。(十八字)
90. 中庸は何の爲に而作られしか(也)。子思子道學の其の傳を失はむことを憂へて作りし也。(二十字)
91. 庸徳を之れ行ひ、庸言を之れ謹しむ。足らざる所有れば、敢て勉めずんばあらず。

餘り有れば、敢て盡くさず。言は行を顧りみ、行は言を顧りみる。君子胡ぞ慥慥爾たらざらむ。(三十四字)

92. 子曰く、人皆予を知ありと曰ふ。驅つて諸を罟獲陷阱の中に納るるも而も之を辟くるを知る莫き也。人皆予を知ありと曰ふ。中庸を擇びて期月も守る能はざる也。(三十九字)

93. 仲尼は堯舜を祖述して文武を憲章す。上は天の時に律り、下は水土に襲る。辟へば天地の持載せざる無く、覆轉せざる無きが如し。辟へば四時の錯行するが如く、日月の代明するが如し。(四十四字)

94. 唯天下の至聖、能く聰明睿知にして以て臨む有るに足る(也)。寛裕溫柔にして以て容る有るに足る(也)。發強剛毅にして以て執る有るに足る(也)。齊莊中正にして以て敬する有るに足る(也)。文理密察にして以て別つ有るに足ると爲す(也)。(五十二字)

95. 下位に在りて上に獲られざれば、民得て治む可からず(矣)、上に獲らるるに道有り。朋友に信ならざれば、上に獲られず(矣)。朋友に信ぜらるるに道有り。親に順ならざれば、朋友に信ぜられず(矣)。親に順なるに道有り。諸を身に反して誠ならざれば、親に順ならず(矣)。身を誠にするに道有り。善に明かならざれば、身に誠ならず(矣)。(七十三字)

孟子

96. 禍福は己より之を求めざる者なし。(九字)

97. 舜の堯に事ふる所以を以て君に事へざるは其君を敬せざる者なり。(十六字)

98. 我れ夫子の道を以て反て夫子を害するに忍びず。(十二字)

99. 吾れ夏を用つて夷を變ずる者を聞けり。未だ夷に變ぜらるる者を聞かざる也。

(十四字)

100. 其民の時を奪ひ、耕耨して以て其の父母を養ふを得ざら使む。(十四字)

101. 苟も其養を得ば、物として長ぜざるは無く、苟も其養を失へば、物として消せざるは無し。(十六字)

102. 今夫の奕の數たる、小數也。心を専らにし志を致さざれば則ち得ざる也。(十八字)

103. 我れ其財を愛みて之に易ふるに羊を以てせしに非る也。宜なるかな(乎)、百姓の

我を愛むと謂ふや。(二十字)

104. 曾子曰く、生には之に事ふるに禮を以てし、死には之を葬るに禮を以てし、之を

祭るに禮を以てするは、孝と謂ふ可し(矣)。(二十一字)

105. 我れ官守無く我れ言責無き也。則ち吾が進退豈に綽綽然として餘裕有らざらむや

(哉)。(二十二字)

106. 牛何くに之く。對へて曰く、將に以て鐘に疊らむとすと。王曰く、之を舍け。吾

れ其の穀餼として罪無くして而も死地に就くが若くなるに忍びずと。(二十六字)

107. 今天下地醜し徳齊し。能く相尙ふる莫きは、他無し。其の教ふる所を臣とするを

好みて、其の教を受くる所を臣とするを好まざればなり。(二十六字)

108. 故に王の王たらざるは、太山を挾んで以て北海を超ゆるの類に非る也。王の王たらざるは、是れ枝を折るの類也。(二十六字)

109. 今や、天下に敵無からむと欲して仁を以てせざるは、是れ猶ほ熱を執りて以て濯がざるがごとし(也)。詩に云ふ、誰か能く熱を執りて、逝に以て濯がざる。(三十一字)

110. 上好む者有れば、下必ず焉より甚しき者有り(矣)。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草之に風を尙ふれば必ず偃す。是れ世子に在り。(三十三字)

111. 孟子曰く、矢人豈に函人より不仁ならむや。矢人は惟だ人を傷けざらんことを恐れ、函人は惟だ人を傷くるを恐る。巫匠も亦然り。故に術は慎まざる可からざる也。(三十六字)

112. 故に曰く、或は心を勞し、或は力を勞す。心を勞する者は人を治め、力を勞する

者は人に治めらる。人に治めらるる者は人を食ひ、人を治める者は人に食はる。

113. 天下の通義也。(三十七字)

孟子曰く、不仁者は與に言ふ可けんや(哉)。其の危きに安んじて、其の菑を利とし、其の亡ぶ所以の者を樂しむ。不仁にして與に言ふ可くんば、則ち何ぞ國を亡し家を敗ること之れ有らむ。(三十七字)

114. 自ら暴ふ者は與に言ふこと有る可らざる也。自ら棄つる者は、與に爲すること有る可らざる也。言禮義に非る、之を自暴と謂ふ也。吾身仁に居り義に由る能はざる、之を自棄と謂ふ也。(四十字)

115. 吾之を聞く(也)、君子は其の人を養ふ所以の者を以て人を害せずと。二三子何ぞ君無きを(乎)患へん。我將に之を去らむとすと。邪を去り、梁山を踰え、岐山下に(于)邑して居る(焉)。(四十一字)

116. 孟子曰く、天下道有れば小徳大徳に役せられ、小賢大賢に役せらる。天下道無け

れば小大に役せられ、弱強に役せらる。斯の二者は天也。天に順ふ者は存し、天に逆ふ者は亡ぶ。(四十字)

117 孟子齊の宣王に見えて曰く、所謂故國とは(者)、喬木有るの謂ひを謂ふに非る也。世臣有るの謂也。王親臣無し(矣)。昔者進むる所、今日其の亡きを知らざる也。(四十二字)

118 吾未だ己を枉げて人を正す者を聞かざる也。況や己を辱しめて以て天下を正す者をや。聖人の行は同じからざる也。或は遠く、或は近く、或は去り、或は去らず。歸するところは其身を潔くするのみ。(而已矣)。(四十二字)

119 如し人の欲する所をして生より甚しき莫から使めば、則ち凡そ以て生を得可き者は、何ぞ用ゐざらむ(也)。人の惡む所をして、死より甚しき者莫から使めば、則ち凡そ以て患を辟く可き者は、何ぞ爲さざらむ(也)。(四十二字)

120 今夫れ天下の人牧にして、未だ人を殺すを嗜まざる者有らざる也。如し人を殺す

を嗜まざる者有らば、則ち天下の民、皆領を引きて之を望まむ(矣)。誠に是の如くならば(也)、民の之に歸すること、由ほ水の下きに就きて沛然たるがごとし。

誰か能く之を禦せがむ。(五十二字)

121 孟子曰く、仕へるは貧の爲にするに非る也。而るに時有りてか貧の爲にす。妻を娶るは養の爲に非る也。而るに時有りてか養の爲にす。貧の爲にする者は、尊を辭して卑に居り、富を辭して貧に居る。尊を辭して卑に居り、富を辭して貧に居るは、惡んか(乎)宜き(乎)。抱關擊柝。(五十三字)

122 此に由つて之を觀れば、君仁政を行はずして之を富ますは、皆孔子に棄てらるる者也。況や之が爲に強戦し、地を争ひて以て戦ひ、人を殺ろして野に盈て、城を争ひて以て戦ひ、人を殺ろして城に盈つるに於てをや。此所謂土地を率ゐて、人肉を食ましむるなり。罪死に容れず。(五十五字)

123 梁の惠王曰く、晉國は天下焉より強きは莫し。叟の知る所也。寡人の身に及び

て、東は齊に敗られて長子死し(焉)、西は地を秦に喪ふこと七百里、南は楚に辱めらる。寡人之を恥づ。願はくは死者の比なに一たび之を洒がむ。之を如何せば則ち可ならん。(五十七字)

第六章 復文演習問題の原文及び解説

〔原文及語法解説考へ方〕

1. 子曰、有教無類。
(有、無が述語となる時の語順轉換)
2. 子曰、過而不改、是謂過矣。
(矣の用法を復習せよ)
3. 子曰、君子恥其言之過其行。
(誤り易いのは恥字の位置である。君子は恥づ……。何を恥づるか。其言之過其行ことを。と考へると、君子は主語で、恥が述語で、以下全部が客語となることが會得できる。この語順を誤る多くの實例は)

君子其言之恥過其行

である。これでは意味をなさぬが實際の復文作文で最も多く陥る誤であるから、くれぐれも注意して誤りをせぬ様にするのである。)。

4. 子曰、士而懷居、不足以爲士矣。

(以字の位置注意。誤ると、「不以爲足爲士矣」とする。考へ方は前項と同じく不足——何が足らぬか、以て士となすには。と考へるのである。以字の位置は特に論語あたりの原文で十分研究すべきである。)

5. 子曰、君子欲訥於言而敏於行。

(欲の位置、前問の考へ方による。君子は主語、欲は述語、以下客語)

6. 子曰、里仁爲美、擇不處仁、焉得知。

7. 孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂。

(「其疾之憂」の語順注意。文法篇の語順轉換の所にて述べしが如く、客語に重きを置くために述語の上に置き、下に之字を置いたもので、本來ならば「憂其疾」とあるべきところである。)

8. 子曰、不患人之不己知、患不知人也。

(「不己知」の語順と「不知人」の語順との比較。己は代名詞、人は名詞。文法篇語順轉換のところ参照)

9. 曾子曰、堂堂乎張也、難與並爲仁矣。

(誤るところは最後の一句である。與字の位置に注意。「與難並爲仁矣」ではない。與字の意は「いつしよに並んで」である故與並を離してはいけない。)

10. 子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉。

自と從と由(みなより)との異ひ、

自 起り來る源の意。又物を示すことで「から」それから「の義。

晨門曰、奚自。子路曰、自孔子。禮樂征伐、自天子出。

從 起り來る源よりも、その後の經過を示す意。

從古以來、彼從東來。

由 自に似て、この理から、この筋合からの義。

由之觀之。

11. 子使漆彫開仕、對曰、吾斯之未能信、子說。

(使字の用法。「吾斯之未能信」の語法。本來ならば「吾未能信斯」であるが、斯即ち「自分が仕へ得べきと言ふことを」重視して之を置いて語順を轉換せるものである。以下この同類の説明は略す)

12. 子曰、奢則不遜、儉則固、與其不遜也寧固。

13. 子曰、甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公。

(「吾衰也」の也字を「吾が衰へたるや」と讀むのはよくない。)

吾不復夢見周公。
吾復不夢見周公。

前者は一度位は夢見たが、もう見ぬやうになつたの意、後者は「夢みないことを」復する意で、絶対に見ぬ意。例として「皆不食」「不皆食」「不果來」「果不來」「不久見」「久不見」等をあげて置くから研究するとよい。

14. 子曰、其身正、不令而行、其身不正、雖令不從。

15. 子曰、我非生而知之者、好古敏以求之者也。

(非字の位置注意。非は「生れながらに知つてゐる者」そんなものではないと打消してゐるのである。「敏以」は「以敏」とあるべきを轉換せるもの。轉換の項參照。)

16. 子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁。

(無と有とが何處までかゝるかを十分注意してかゝらぬと、次の様な文になつ

てしまふ。

求生無^x以害仁、殺身有^x以成仁。

17. 子曰、文莫吾猶人也。躬行君子、則吾未之有得。

(「文莫」は、文、僕の假借にて暹勉の意。これを「文は吾猶人の如きこと莫からんや」とよむ人もある。

「吾未之有得」の之は代名詞——語順轉換。)

18. 子曰、知之者不如好之者、好之者不如樂之者。

19. 子謂子賤、君子哉若人、魯無君子者、斯焉取斯。

(「若人」をかくの如き人と讀むことを頭へ入れて置く。上の斯は子賤その人を指し、下の斯は子賤の徳を指す)

20. 子曰、士志於道而恥惡衣惡食者、未足與議也。

(「未足與議也」の與字を、足るの上に置き易い。文の意味を考へて見よ。「與に

21.

子曰、爲政以德、譬如北辰、居其所、而衆星共之。

(「足らぬ」ではなくて「與に議るには足らぬ」のである。)

(「如」字を衆星の上などに置かぬこと。如のかゝる範圍を考へよ。「譬へば如し……」どんな如しか」で、以下全部は如しにかゝるのである。こんな事は一度で直ぐ呑み込めさうだが、いざ實際となると何度でも間違ふことである。)

22.

子曰、不曰如之何、如之何者、吾末如之何也、已矣。

(「不」曰のかゝる範圍を考へる。末を未に作つた書もある。それならば「吾末だ之を如何ともせざるのみ」となる。)

23.

子曰、君子而不仁者有矣夫、未有小人而仁者也。

(「有」の語順轉換に注意。これは復文をする上に、こんな形式の和文では原文通りにすることはむづかしい。)

「有君子而不仁者矣夫」となつてもよいとせねばなるまい。

24.

子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫。

(「以」字の位置を「可」字の上に置かぬこと)

25.

子曰、孰謂微生高直、或乞醢焉、乞諸其隣而與之。

(「諸は之、於のつまつて一字となれるものにて同意である。直字を謂字の下に置かぬよう。)

26.

子曰、居上不寬、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉。

(「何以」の語順——疑問文とか反語とかである。何……哉と呼應する。)

27.

子曰、不患無位、患所以立、不患莫己知、求爲可知也。

(「莫己知」の語順。己は代名詞である。)

28.

子曰、中人以上、可以語上也、中人以下、不可以語上也。

(「以と可との語順を誤らぬやうにとてその類似問題の練習である。)

29.

子曰、善人爲邦百年、亦可以勝殘去殺矣、誠哉是言也。

(可と以とを轉倒せぬように注意。「亦出来る」であるからこの「亦可」を切り離さぬように。)

30. 子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、可謂好學也已矣。

(「日知其所亡、月無忘其所能」の「其」字の位置を、日の下、月の下に置けば意味が大いに違ふ。前者は「自分の無い所」又は「自分の能くする所」の意となり、後者にすると「それは無い所を知り」「それは能くする所を忘れない」といふこととなる。文意を確實に掴むことが、復文を正しくする一の重大な条件である。)

31. 子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉。

(「其」字の位置注意。前問解説參照。焉……哉は反語を形成する。)

32. 子曰、泰伯其可謂至德也已矣、三以天下讓、民無得而稱焉。

(「其」字に就いては前問及前々問と比較して、その意と布置法とを會得するこ

と。)

33. 子夏曰、雖小道必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也。

(是以を以是とせぬこと、以是と云ふ語順は無いのである。この事は特に確實に記憶してゐないと他の、以人とか以故とかと混同して以是としがちである。)

34. 林放問禮之本、子曰、大哉問、禮與其奢也寧儉、喪與其易也寧戚。

(比較の表はし方を方程式の如く記憶してしまふことが大切である。)

35. 子曰、不仁者不可以久處約、不可以長處樂、仁者安仁、知者利仁。

(「不以可久處約」とはよく陥る誤りの布置である。「べからず」の付く語句にあつては、その「べからず即不可」は二分してはいけない。所がよく右の様な復文が生まれて来るのは二分してはならぬことを忘れるからだ)

36. 子曰、孟之反不伐、奔而殿、將入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也。

(「非敢後也」の語法復習せよ)

37.

子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博奕者乎、爲之猶賢乎已。

38.

子曰、有德者必有言、有言者不必有德、仁者必有勇、勇者不必有仁。

(「不必有德」「不必有仁」と「必不有德」「必不有仁」との差異。前者は「或ひは有るかも知れぬがない」の意であり、後者は「必ず無い」の意である。後の必は「不有」といふことが必ずであるといふのである。類例を四書中に求めて研究すること。)

39.

子曰、弟子入則孝、出則悌、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。

(「則」字は普通「レバ則」と言はれる語で、上を承けて言ふ語。原因結果の法則を述ぶる也。ついでに即、乃等の極く普通な語の差異を述べて見る、と

即——今の意。「チキニ」「スグサマ」の意。とりも直さずと譯す。

乃——「ソコデ」の意。上文と下文との繼目に置く。承上起下。

便——即よりも意が緩で「スグニ」「タヤスク」の意。

40.

有子曰、信近於義、言可復也、恭近於禮、遠恥辱也、因不失其親、亦可宗也。

41.

子貢曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人、子曰、賜也、非爾所及也。

(「非爾所及也」——非の位置に注意。「爾非所及也」ではない。非は「お前の及ぶ所」そんな所ではないのだ。と下文全部を否定してゐるのである。亦字は通俗に「モマタ」と言はれてゐるもので「×××モマタ」である。「マタ」の字意を左にあげると、

又——一度済みし事の重ねてある意。幾度も重ねていふこと。

復——「フタタビ」の義。重也・再也・反復・重復の轉義。

亦——俗に「モマタ」といふ。旁及の辭と注す。一物ありて之をうけてコレ

モマタといふ也。

有——十有五年等言ふ時の有(マタ)「ソノ上」「ソレカラ」マタの意。

也——俗語に多く用ふ。亦の意にして亦より意緩なり。

42. 子曰、民之於仁也、甚於水火、水火吾見踏而死者矣、未見踏仁而死者也。

(比較「より」の語法記憶すべきこと。「於」字の用法は實に廣い。心して讀めば四書中に於ける、於字の研究は實に面白い)

43. 子貢曰、紂之不善、不如是之甚也、是以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉。

(これはた易い問題として提出したものである一字の間違ひもない様に出來ねばならぬ。もつとも、不字は注意せねばならぬ。)

44. 子貢問曰、孔文子何以謂之文也、子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也。

(何以の語順注意——疑問文である。「謂_フ之文_ト」(何々を何々と謂か)といふこの型を記憶して置くこと。)

45. 哀公問曰、何爲則民服、孔子對曰、舉直錯(措)諸枉、則民服、舉枉錯(措)諸直、則民不服。

46. 子曰、後生可畏、焉知來者之不如今也、四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也已。

(焉知を離ぬやうに注意すること。)

47. 子曰、可與言而不與言、失人、不可與言、而與之言、失言、知者不失人、亦不失言。

(與字の置き方を十分腹に入れて誤らぬやうに。與字は以字と共に復作文の際には、そのかゝる範圍を思考してからペンをとる、くせをつけること)

48. 子謂伯魚曰、女爲周南召南矣乎、人而不爲周南召南、其猶正牆面而立也與。

(「矣乎」——學んでしまつたかの意。猶字が「ナホ……ゴトシ」であること。其字を猶字の下にせぬこと、其字の意味を考へて見よ。)

49. 曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、

不亦遠乎。

(「士不可以不弘毅」の以字を士の直下に置き易い。「士はべからずだ」、何が「べからず」か、「以つて弘毅ならざるべからずだ」と考へる。「仁以」は「以仁」の語順轉換。「不亦重乎」「不亦遠乎」の語法記憶。學而第一にも「不亦說乎」「不亦樂乎」「不亦君子乎」等あり、參照するとよい。)

50. 周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不以、故舊無大故、則不棄也、母求備於一人。

51. 子游爲武城宰、子曰、女得人焉耳乎、曰、有澹臺滅明者、行不由徑、非公事、未嘗至於偃之室也。

52. (「行不由徑」の「不」字を行字の上に置くな。若しそうすれば「不」が下全部を否定することになつて意味を成さぬ。「行きませないし、徑にもよらぬ」となる。)

子曰、善人吾不得而見之矣、得見有恒者斯可矣、亡而爲有、虛而爲盈、約

而爲泰、難乎有恒矣。

(亡而以の讀み方正しくは「……亡けれども有となし、虚しけれども盈てりとなし、約なれども泰なりとなす……」とすべきであるが、今は射復の便を思つて直譯體とした。「吾不得而見之矣」の語順に注意。)

53. 子曰、莫我知也夫、子貢曰、何爲其莫知子也、子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎。

(「莫我知」の我の位置と、「其莫知子」の子の位置とについて考へて見ること。代名詞と名詞とである。)

54. 子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。

(「賢賢易色」の讀みに「賢を賢び色を易り」といふのがある。能字の位置。)

55. 有子曰、禮之用和爲貴、先王之道斯爲美、小大由之、有所不行、知和而和、

不以禮節之、亦不可行也。

(「禮之用和爲貴」の読み方「禮の和を用ふるを……」といふのもある。)

56. 葉公問孔子於子路、子路不對、子曰、女奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。

(「葉公問孔子於子路」は、主―述―客―補の形式である。云爾字を「しかいふと云ふのみ」と讀むことは昔から行はれてゐるが、これは單に語の終りを示す助辭である故そんな風には讀まないといふ武内博士の説に従ふ。)

57. 子曰、吾十有五而志乎學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而縱心所欲不踰矩。

58. 仲弓爲季氏宰、問政、子曰、先有司、赦小過、舉賢才、曰、焉知賢才而舉之、曰、舉爾所知、爾所不知、人其舍諸。

(「舉爾所知」を「爾舉所知」とせぬこと。前者は「爾舉_レ爾所_レ知」の主語の爾を略

せる形である)

59. 柳下惠爲士師、三黜、人曰、子未可以去乎、曰、直道而事人、焉往而不三黜、枉道而事人、何必去父母之邦。

60. 顏淵死、顏路請子之車、子曰、才不才亦各言其子也、鯉也死有棺而無槨、吾不徒行以爲之槨、以吾從大夫之後、不可徒行也。

(「亦各言其子也」の各字の位置。各は其の子といふ親」を指す故、「各言」の各はこの節の主語である。「亦言各其子也」ではない。「吾不徒行爲之槨」の一文はよく文法書に引かれて打消の説明に用ゐられるのである。不字が吾の直下にある譯は、「吾はかち歩きをすることはやめた、従つて槨も作らなかつた」と、徒行と爲_レ之槨との二動作を共に否定するのである。之を「吾徒行不以爲之槨」とすると「自分がかち歩きをして、槨を爲らない」で意をなさぬ事になる。「以吾從大夫之後……」の読み方に「吾が大夫の後に從へるを以て徒行すべか

らざるなり」といふのがある。―武内博士―

61. 齊景公問政於孔子、孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子、公曰、善哉、信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾豈得而食諸。

(叙述形式の變つたものの例として擧げて置いた。「君君」は、主語と述語とよりなる單文で、述語は「君たり」)

62. 儀封人請見、曰、君子之至於斯者、吾未嘗不得見也、從者見之、出曰、二三子何患於喪乎、天下之無道也久矣、天將以夫子爲木鐸。

(「吾未嘗不……」の二重打消記憶)

63. 公山弗擾以費畔、召子欲往、子路不說曰、未之也已、何必公山氏之之也、子曰、夫召我者而豈徒哉、如有用我者、吾其爲東周乎。

(「何必公山氏之之也」は補語である所の公山氏を力強く言ふために、之字を後に置いて述語に先行した語順轉換である。)

64. 哀公問於有若曰、年饑用不足、如之何、有若對曰、盍徹乎、曰、二吾猶不足、如之何其徹也、對曰、百姓足君孰與不足、百姓不足君孰與足。

(「盍徹乎」の形記憶。「孰與もよく出る形だから注意」)

65. 子曰、可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權、唐棣之華、偏其反而、豈不爾思、室是遠而、子曰、未之思也、夫何遠之有哉。

(「與」字の布置に注意。「不爾思」「未之思」の爾、之は代名詞。語順轉換參照。)

66. 子曰、小人哉、樊須也、上好禮則民莫敢不敬、上好義則民莫敢不服、上好信則民莫敢不用情、夫如是則四方之民襁負其子而至矣、焉用稼。

(「民莫敢不……」の語順記憶せよ。公式として「……莫敢不……」を頭に入れて置くこと。)

67. 楚狂接輿歌而過孔子、曰、鳳兮鳳兮、何德之衰也、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而、孔子下欲與之言、趨而辟之、不得與之言。

68. 桀溺曰、子爲誰、曰、爲仲由、曰、是魯孔丘之徒與、對曰、然、曰、滔滔者天下皆是也、而誰以易之、且而與其從辟人之士、豈若從辟世之士哉、擾而不輟、
(與……豈若……哉の公式記憶。)

69. 叔孫武叔毀仲尼、子貢曰、無以爲也、仲尼不可毀也、他人之賢者丘陵也、猶可踰也、仲尼日月也、無得而踰焉、人雖欲自絕、其何傷於日月乎、多見其不知量也。

70. 「無得而踰焉」と「得而無踰焉」との差異を考へて見よ。「多其不知量也」の其字の位置が、量字の上に来て、「多見不知其量」となればどんな意味になるか、既習の文法的知識にて考察して見ることに。總べて斯く一々に考察反省して進むことは遅々としてはかどらぬ様だが、實力の養成は右を措いては他にないのである。面倒がらずに進むところに成功はある。

71. 子曰、我未見好仁者惡不仁者、好仁者無以尙之、惡不仁者其爲仁矣、不使不仁者加乎其身、有能一日用其力於仁矣乎、我未見力不足者、蓋有之矣、我未之見也。

72. 子曰、富與貴、是人之所以欲也、不以其道得之不處也、貧與賤、是人之所以惡也、不以其道得之不去也、君子去仁、惡乎成名、君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是。

73. 曾子有疾、孟敬子問之、曾子言曰、鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善、君子所貴乎道者三、動容貌斯遠暴慢矣、正顏色斯近信矣、出辭氣斯遠鄙倍矣、簞豆之事則有司存。

74. 陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚、孔子時其亡也、而往拜之、遇諸塗、謂孔子曰、來、予與爾言、曰、懷其寶而迷其邦、可謂仁乎、曰、不可、好從事而亟失時、可謂知乎、曰、不可、日月逝矣、歲不我與、孔子曰、諾、吾將仕矣。

〔歸孔子豚〕の語順——歸は與奪動詞である——述——補——客。「孔子時其亡也」

の時字「其の亡きを時として」とも讀まれてゐるが、時は、伺の借字であるから「うかがふ」と讀む方よし。

74. 定公問、一言而可以興邦有諸、孔子對曰、言不可以若是其幾也、人之言曰、爲君難、爲臣不易、如知爲君之難也、不幾乎一言而興邦乎、曰、一言而喪邦有諸、孔子對曰、言不可以若是其幾也、人之言曰、予無樂乎爲君、唯其言而莫予違也、如其善而莫之違也、不亦善乎、若不善而莫之違也、不幾乎一言而喪邦乎。

（「一言而可以興邦有諸」の以字の位置、今迄度々注意して來たからもう間違ふ様ではいけないと思ふ。「言不可以若是其幾也」の讀み方に「言は以て是の若きものあるべからざるも、其幾はとんどちかき（殆近）ものあり」といふものもある。それでも復文では右の通りでよいが、返點は違ふ。末句の語順間違ひやすい故よく注意すること。）

（大學）

75. 右之欲明明德於天下者、先治其國。

（「明明德於天下」於字注意。）

76. 大學之道、在明明德、在新民、在止於至善。

77. 其本亂而未治者否矣、其所厚者薄而其所薄者厚、未之有也。

（其字の布置に留意せよ。「未之有」の語順は既に幾回も出た。）

78. 所謂誠其意者、毋自欺也、如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙。

79. 小人閒居爲不善、無所不至、見君子而後厭然、揜其不善而著其善。

80. 唯仁人放流之、進諸四夷、不與同中國、此謂唯仁人爲能愛人、能惡人。

（「不與同中國」の與字の措置を誤るな。「與に中國を同じうすることをさせない」といである。「與不同中國」は、「中國に一緒に住まないことを與にする」意で兩者大いに異なる）

81. 未有上好仁而下不好義者也、未有好義其事不終者也、未有府庫財非其財者也。

82. 大學之書、古之大學所以教人之法也、蓋自天降生民、則既莫不與之以仁義禮智之性矣。

(自字を從、由にせぬこと解説10を参照せよ。「莫不」を「與之」の下にせぬこと注意)

83. 故君子有諸己而後求諸人。無諸己而後非諸人。所藏乎身不恕而能喻諸人者、未之有也。

84. 詩云、緝蠻黃鳥、止于丘隅。子曰、於止、知其所止。可以人而不如鳥乎。詩云、穆穆文王、於緝熙敬止。為人君、止於仁、為人臣、止於敬。

(「可以人而不如鳥乎」の可字の位置を誤るな。總べて文字の布置はその置く可き理由を會得して置かぬと、いくら復文の功を積んでもその甲斐は少い。要

するに文法的に。)

(中庸)

85. 誠者非自成己而已也。所以成物也。

86. 莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其獨也。

(乎、は比較を表はす。「君子慎其獨也」の其字を慎字の上にと、「君子は其れは獨を慎しむのである」となる。原文の其字の意は「君子は自己の獨を慎しむのである」の意。)

87. 君子未有不如是而蚤有譽於天下者也。

88. 君子之道、辟如行遠、必自邇、辟如登高、必自卑。

(二つの必字及二つの自字に注意。自は「起り來る源を示す」意。)

89. 子曰、道不遠人、人之爲道而遠人、不可以爲道。

(「不可以」の定跡を破るな。)